統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
38

日本における統計学の発展

第 38 巻

話し手　米沢治文

聞き手　三潴信邦
広田純

統計数理研究所図書室

1982年3月29日（月）

東北学院大学にて

10/12
26026

26026

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　それでは、いまから米沢先生にお話を伺うわけですけれども、先生が非常に詳しい略歴をつくってくださいましたので、ぼくらの方も非常に助かっているわけです。先生の場合は東北大に来られて、終始一貫東北大ですから、非常にすっきりした略歴ですので、経歴についてはそうお伺いすることはないと思いますけれども、1つお伺いしたいのは、先生は東京高師の附属中をご卒業になったわけですが、そのときに、佐藤良一郎先生の数学の講義をお聞きになったと思います。佐藤先生とのインタビューの中にも、米沢先生の名前が出てきます。その後、先生が統計学をおやりになったり、あるいは数学的なことに興味を持たれるきっかけに、佐藤先生との出会いは、いまお考えになってどの程度ありますのでしょう。

米沢　佐藤先生は、ただ数学の先生というよりも、むしろ担任だったんです。中学に入ったときから卒業のときまで担任の先生なんです。ただ、同学年に3つのクラスがあって、担任の先生が3人いて、どの先生がどの組の担任ということにはなっていなかった。そういうような制度だったんです。とにかくその3人の担任の先生のお1人で、一番先輩でもあられたと思うんで、そういう意味でも非常にお世話になった。

数学の講義のことも記憶にはありますけれども、担任としていろいろしかられたり何かしたことも、かなり記憶にあります。

三潴　先生は、高師附属中は5年まで行かれましたか。

米沢　5年まで行きました。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　じゃ5年間、佐藤先生とのおつき合いが……。

米沢　本当にお世話になりました。

三潴　ぼくは、先生は佐藤先生との触れ合いがあるから、一高では理科に違いないと勝手に思い込んでいたんですが、文甲ですか。それは全くぼくの思い違いだったんです。それで一高に入られてから、もしお差し支えなければ、それから東北大にいらっしゃるまでのところで、いまはもう時効のこともおありでしょうから、お話しいただければ……。

米沢　その前に、佐藤先生の数学で統計との結びつきができたかどうかというお話ですが、それは特になかったと思います。後から考えると、特に解析幾何というか、グラフのことなんかを、非常によく教えてくだすったと思っていますけれども、中学時代の数学の教育から、統計というものに志す素地ができたとかそういうことはなかったと思います。

三潴　むしろ先生は文科にいらしたんだから、数学よりは文科的な方がお好きだった……。

米沢　いや、そうでもなくて、ふさいころからむしろ自然科学の方に、どっちかといえば興味があった。たとえばラジオ放送なんかが始まったころでしたし、自分でラジオの器械をつくったり、電気をいじったりしたことはずいぶんありますが、中学4年のときにたまたま父が亡くなったもので、母が、世の中のことがわかる勉強の方がいいということがあったわけです。それというのは、母の家は、兄弟などほとんど医者ばかりなので、自然科学の方をやると世の中のことがわからないということを母は痛感していたようなんですね、いま考えると。そん

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

なようなことで、高等学校はむしろ文科を選んだわけです。

三潴　先生のお父様は、三菱の会社にいらしたんですか。

米沢　そうです。

三潴　そうすると、法科系の方ですか。

米沢　昔の東大の法科を出たわけです。そのころ、経済科というのはなかったでしょうから、法科の政治科というやつですね。

三潴　それでお父様は終始一貫三菱で過ごされたわけですか。

米沢　若くして亡くなりましたから。

三潴　そうでしょうね、先生の中学の4年でしたら。

それで文甲を選ばれたのは？

米沢　それは、特に理由はなかったと思います。

広田　昭和3年に中学を卒業されて、すぐ一高へ入られたわけですね。

米沢　そうです。一高で2年は終わったんだと思うんですけれども、いまでいうと諭旨退学というやつですか、そんな形だったと思います。

三潴　かなりアクティブな……。

米沢　やっぱりグループに入ったとかいうようなことだけですね。

広田　『資本論』や何かの読書サークルみたいなこと……。

米沢　それだけのことでね。

三潴　そのころは、何かきっかけがあればみんな……。

それで今度、東北大の聴講生になられるわけですけれども、そのころ聴講生制度というのは、帝国大学では東

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

北大だけだったんでしょうか。東大は少なくともなかった。

米沢　京大にはあったかもしれませんが、東大には全然ありません。九州には専科生という同じような制度があって、その両方を受けたわけです。

三潴　それでずっと東北大へいらっしゃるわけですけれども、九州ではなく東北大を選ばれたのは……。

米沢　とにかく東京が家でしたから、近い方がいい。それから母方の叔父が、東北大の医学部のいまでいうと医局にいたわけで、そんなような関係もあって。その叔父は、すぐ仙台にはいなくなりましたけれども。

三潴　メモにもちょっと書いておきましたし、それから、先生の東北大ご退官のときの先生を囲む座談会を拝見して、その中からだいぶ知識を得たんですが、理学部教授の林鶴一先生が統計数学を法文学部に教えに来ておられた。その講義を当然お聞きになっているわけですか。

米沢　そうです。それはいま思うと、統計学関係の講義としては唯一の講義だったわけです。私の在学中には、いわゆる経済統計学というような講義はなかったんです。だから、早くからそういうものを聞いておきたいという気があったんですけれども、私の記憶では、例の本科生に直る試験がなかなか厄介なんで、高等学校卒業検定試験と同じことなんです。それに受かるのがまず先決だったものだから、1年からでも聴けたんだけれども、1年、2年のときに聴かないで、ようやく3年のときに聴いたような記憶です。

三潴　当時の法文学部で、統計数学というのを置いたこと自身は、ある意味ではずいぶんユニークですね。そう

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いうことが、先生を囲む座談会にも出てくるんですが、それはどなたの発想ですか。ともかく法文学部でしょう。

米沢　それがよくわからないんですが、おそらくこっちからもお願いしたかもしれないし、向こうからも、せっかく法文学部ができたんだから、そういうことをやってやろうということで始まったんじゃないかと思う。その始まったいきさつは、とにかくわれわれより一時代ほどでもないけれども、少なくとも4～5年は以前だったものですから、ちょっと私もわからないのですが、林先生は非常に熱心にやられていました。

広田　これは、やっぱり常置された科目だったんですか、特別講義的なものじゃなくて。

米沢　毎週。しかも、普通の講義は大体2時間で1回なり2回なりやるわけだけれども、これは林先生の希望で1時間ずつ週に2回時間割りを組んでありました。それで、ちゃんとそういうふうに来てやられたんですね。

三浦　そのころに、例の田中館先生の経済地理というんだったか、ぼくも講義を聞いたんですが、そういう講義もあったわけでしょう。

米沢　ありました。

三浦　田中館愛橘さんの子供ですか。

米沢　養子だといわれているんです。田中館秀三氏ですね。経済地理学と植民地理学を1年おきに毎年やっていたんです。

三浦　先生がその後しばらくたって地域経済学といいますか、そういうことをお考えになるきっかけに、もしかしたら田中館先生の経済地理というか、そういうものがいささかの関係はありますか、深層心理か何かに。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　それはあまりないと思います。その方は、ちょっと別の動機だと思うんです。

三潴　それをお伺いするのは、もうちょっと後かもしれませんね、時間の流れからいえば。

米沢　研究室に入ってからですね。

三潴　それであと本科生になられて、卒業なさって、副手、助手、助教授といらっしゃるわけですけれども、先生の在学時代に、統計については、いまおっしゃったように林鶴一先生の統計数学しかなかったわけですが、経済学でいえば、和田佐一郎先生が「原論」だったんですか。

米沢　そうですね。入学のときには、堀経夫さんが「経済学史」と「経済史」などを担当しておられましたが、通年講義としては「経済史」だけしか堀先生のは聴けなかった。先生が京大へ移られたので。

三潴　そのころ和田先生は、やはり体があまり丈夫じゃなかったでしょうか。ぼくらのときは、始終病気なさって、よく休講があったんですけれども。

米沢　確かに丈夫じゃなかったけれども、そんなに休まれたりなんかはしなかったように思います。ほかの先生に比べて、正味の講義時間が短いとかいうようなことはありましたけれども。

三潴　当時の経済学科の中心的存在は、和田先生、堀さん。年齢的には和田先生の方が上でしょう。

米沢　同じぐらいだったんじゃないかと思います。しかし、学生から見てはよくわからぬ。

三潴　教授陣は……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　やっぱり堀さんと和田さんで、そのすぐ次が長谷田泰三さん、宇野弘蔵さんというぐらいのことだったですね。

三潴　ぼくが昭和16年に東北大に入ったころは、和田先生が「原論」だったんだけれども、いま思えば、すでにシュンペーターの講義だったんですよ。先生がお聞きになった和田さんの「原論」というのは、マルクス経済学？

米沢　両方やったんですが、それが非常におもしろいというか、たしか客観学説という名前でマルクス経済学をまずやって、2学期の終わりごろから主観学説という名前で、近経の方に移ったような記憶ですね。だから、両方やられて、私のころは、どちらかというと客観学説の方が時間的にはよけい講義されたように思いますね。

三潴　先生の学生時代、昭和ノけたのころは、すでに講義なんかをマル経ずばりでやることは、相当困難な時期でしょうか。

米沢　もっとも人にもよりますけれども、和田さんはマルクスという名前は出さずに、客観学説と称していました。

三潴　それは、そのころはマルクスということを教室でいうのは、すでにはばかられたんでしょうか。

米沢　やはり昭和6年以後のことで、満州事変後でしたから、いま思えばそうでしょうね。

三潴　米沢先生ご自身は、たとえば『資本論』を一番最初に読まれたのは、一高のときですか。それとも大学に来られてから。

米沢　ちょっとよく記憶しないけれども、やはり大学で和田さんの客観学説を理解するためにも必要だった。そ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

れから2年のときでしたか、宇野さんの「経済政策」。

三潴　宇野先生は、たしかそのころ助教授でしたか。

米沢　でも、学生の目から見ると、宇野先生はほとんど教授と違いはなかったですね。

三潴　宇野先生は、助教授は教授を助けるんだから、助教授の方が偉いんだといっておられたとか。文部省が意地悪して、なかなか教授に昇進させなかったですね。

米沢　最後までそうですね。

三潴　そうすると、宇野先生の「経済政策論」もお聴きになっているわけですね。

米沢　ええ。

三潴　先生は経済統計学でずっと来られたわけですが、やっぱりそのときの先生における経済学の素地というか基礎というのは、和田先生とか宇野先生のそういう勉強が当然基礎になっているわけでしょうね。

米沢　そうだと思いますね。

三潴　そのころは、先生ご自身が『資本論』を持つとか図書館で『資本論』を読むことは、特に禁じてはいなかったですか。僕らのときは、『資本論』はすでに封印されていた。

米沢　そういうことはなかったと思います。

三潴　まだ時期的にそうですね。

有沢先生が、統計学の非常勤講師でおいでになるようになったのは、先生が副手になられた翌年と記録にはなっているんです。先生が昭和9年に副手になられて、昭和12年に、有沢講師が統計学の講義に見えた。そのときは、先生はもう学生じゃなくて、スタッフでいらしたわけでしょう。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　いまでいえば大学院生みたいなものですけれども。

三潴　だから、有沢先生の講義を教室でお聴きになるわけではなかった。

米沢　いや、そのときはもちろん教室で聴きました。いま考えると非常にありがたいことなんで、副手になるときは、人によってあまり専攻科目が決まらないままでいた人もありますが、私の場合には、長谷田さんが、やっぱり統計学をやらぬかということで、その方向が決まっていたんです。それでは、統計数学はあったけれども、いわゆる経済統計学みたいなものはないから、それをやらなきゃいかぬというので、わざわざ東京から有沢先生を招聘して、集中講義をやってくだすったわけだから。

三潴　有沢先生は、長谷田先生が引っ張ってこられたんでしょう。

米沢　ええ。それから宇野さんなども同意見で、そうされたと思います。

三潴　いまちょっとおっしゃった長谷田先生が米沢先生に統計学をやらぬかとおっしゃったということですけれども、米沢先生自身も統計学をやろうと考えておられたわけですか、主体的にといったらおかしいですけれども。

米沢　いつごろからそういうあれになったか、ちょっとわからないんですが、少なくとも研究室に入るときは、そういう方面をやるという自覚はあったと思います。

三潴　それは、さっきの佐藤良一郎先生のことは、ずいぶんお若いころの話ですから、先生の統計学とはいきなりは結びつかないんでしょうけれども、林先生の「統計数学」を聴かれて、米沢先生が統計学に向かっていかれるきっかけはそこにあったんでしょうか。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　それは確かにあったと思いますね。

三潴　そうすると、僕なんか後から考えて、一方で和田先生や宇野先生などの、簡単にいえばマル経と、林先生の統計数学と、そういうものが米沢先生の中で一体化する。後輩はそういうふうに理解しがちなんですけれども、大体そういうことでしょうか。

米沢　まあ、当たらずといえども遠からずというか……。（笑）

三潴　有沢先生の講義ですけれども、この時期には、有沢先生ご自身はテキストだったんですか。

米沢　それできょう用意してきましたが、『統計学講義案』（明善社昭和9年4月）を使った。

三潴　戦後、復刻になったのを僕は持っているんです。これは、ちゃんとした本だったわけですね。

米沢　それをわざわざ明善社が仙台へ出張して、教室の前で売っていたのを、私、覚えています。

三潴　これはちゃんと活字体のだから、いわゆるプリントじゃなくて、有沢先生の著書ですね。

広田　戦後は、『統計学要論』というので、ほとんど同じ内容じゃないかと思う。各章の題目なんかは同じ。

米沢　あの本は、東大の戦後の講義のあれじゃないのかな。

広田　有沢さんが戦後東大に復帰してこられて、すぐ講義用にそれを出版されたんで、これがもとになっているんでしょうね。おそらくほとんど同じだと思います。国調の調査票が入っている。（第9表各国国勢調査事項一覧）

三潴　そうすると、有沢先生の講義は当然のことながら、社会統計学というか、あるいは学史なんかに相当講義の

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

重点があったんでしょうか、先生の印象では。

米沢　学説史的なことは、いまでも非常に覚えています。重点が置かれていましたね。集中講義だったから、時間数は普通の講義とそんなに違わないぐらいにとってあったと思います。

広田　やはり弁証法的唯物論というようなことを、はっきりそういう表現で話されましたか、大数法則の基礎づけのようなところで。この中に書き込みがありますね、(61ページ) ブハーリンとか、エンゲルス、アンチデューリングとか、レーニンとか、これは米沢先生の書き込みですか。

米沢　そうだと思いますね。しかし、何だか書体がちょっと違うようにも……。(笑)

広田　書き込みは全部、マルクス、レーニン関係の文献からですね。そういう点で強い印象を受けられたとか、そういうご記憶はありませんか。

米沢　それはあります。やはり、そういう点に非常に教えられるところが大きかったと思う。蜷川さんの統計学の本が、そのころずいぶん出ていましたから、それも自分では読んでいたわけです。やはり同じ統計学でも、蜷川さんも、ある意味で立場は有沢さんとそう違わないわけだけれども、表現や何かはずいぶん違うし、重点の置きどころは違っているという感じは受けました。どちらがいいかという判断は、ちょっとまだできなかったけれども、いずれも感心していたわけですね。

三潴　先生は、昭和10年度と12年度と両方講義をお聴きになったんですか。

米沢　いや、最初のときだけじゃないかと思うんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

だから、あるいはこの書き込み、僕の筆跡でないのがあるようにも思うんだけれども、その次の年度はだれかに貸したのかとも思う。

三潴　有沢先生は、ゼミのようなことはなさらなかった

米沢　そういうことは、ちょっとやる余裕がなかったわけですね。だから、あいている時間は、むしろ宇野先生などと話し込んでおられて、そういうのをわきで聞いたり、野球をやったり、そういうようなことだったように記憶します。

三潴　有沢先生は非常勤で来られたのは、その2年間だけなんですね。

米沢　そうですね。その後の年に事件が起こった。

広田　昭和13年の教授グループ事件ですね。13年の初めのころですね。そうすると、12年の集中講義はできたけれども。

三潴　あと有沢先生の講義で何か……。

米沢　いろいろ思い出さなきゃいかぬなとは思ったんだけれども、確かにこういうあなたのメモにいろいろ名前は出ていますし、それぞれ覚えています。

三潴　Winklerというのは、東大に外人講師で来て……

米沢　違うと思いますね。

広田　Winklerは、いまも生きていらっしゃるんですね先生、どこかに書いておられる。

米沢　そうかもしれません。とにかく私がI.S.I.のウィーン大会で話を聞いたんですから。

広田　相当な年配……。

米沢　そのときも、よぼよぼというほどじゃなかったけれども、相当……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　有沢先生自身は、ドイツでだれについておられたんでしょうか。糸井（靖之）さんがそくなった後、統計の勉強に切りかわるわけでしょう。それで有沢先生自身は……。

広田　だれかについてというんじゃなくて、主としていろんな本をたくさん買われた。

三潴　蜷川さんにずいぶんアドバイスを受けたなんて、どこかで読んだけど。有沢先生が何を読んだらいいかと聞いたらば、これを読めとかいわれたって。

それで有沢先生が2年、昭和10年度と12年度と仙台に来られて、そのちょうど中間の昭和11年に米沢先生が助手になられて、それから講師、助教授になられるわけですが、この略歴のメモに書きましたいわゆる教授グループの検挙のときには、宇野先生が東北大で検挙されたわけです。服部（英太郎）先生の方は、そのころもうおられた人ですか。

米沢　おられたけれども、やはり、そのグループには属していなかったせいか、直接検挙とかそういうことにはならなかったわけですね。

三潴　あのときは、東北大関係では、宇野先生と、あと学生や大学院生とか、そういうのがつかまったんですか。

米沢　それから研究室の助手の杉森（二郎）君、戦後代議士になった高田富之君。研究室に5人助手とか副手がいたわけだが、そのうちの3人がつかまったわけですね。

広田　高田富之氏も助手だったわけですか。

米沢　副手ですね。

広田　何を専攻していたんですか。

米沢　まだ専攻も何も決まらないで……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　残ったという……。

米沢　ちょうど学年初めとか何とかいうときじゃなくて、何度も仙台に来て研究室に入れてくれといったものだから、和田さんがしぶしぶ入れることにした。その辞令が出る当日に連れていかれちゃったというエピソードが高田君にはあるんです。(笑)

杉森君は、経営学の方を専攻するということで、それじゃ仙台にいてはダメだからということで、いまの一橋大学、商科大学に留学みたいにしていたんで、それを逆に東京グループとの連絡を取りに行ったというふうに見られて、つかまった。あれは本当に運が悪いことだった。ですから、つまり残ったのは私と飯渕敬太郎君だけ。

三潴　会計学か何かで立野(保男)さんという方がおられたですね。

米沢　やっぱり会計とか経営とかいうのを充実しなきゃいかぬというので、人を探していたわけで、豊崎さんの推薦であの人を迎えたわけです。ちょうど私と同年ぐらいだったんで、仙台に来て交わったわけですけれども、あまり親しくならないうちに、やっぱりそういうことになっちまったわけですね。

三潴　米沢先生ご自身も、身の危険を感じられたでしょうね。

米沢　それはずいぶん感じたんです。

三潴　やっぱり研究室を見られてもいいように、少し身辺整理というか、ものを隠しておこうとか、そんなことはありましたか。

米沢　それはありました。焼いたものもあるんじゃないかと思います。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　先生の履歴でいえば、やがて講師になられて、助教授になられるんですけれども、統計学の講座は、先生が教授になられたときにできたんですか。昭和24年、経済統計学講座というふうに、年譜に書いてあるんです。講座制……。

米沢　戦後ですね。

三潴　24年というと戦後、新制大学……。

米沢　いや、新制大学になる1年ぐらい前に認められたと思います。

三潴　それは「経済統計学」と書いてあるんですけれども、ただ「統計学」じゃなくて。

米沢　そういう名前で、講座が通ったと思います。

三潴　30周年の経済学部の研究記念号の年譜には、そういうふうに書いてあるんです。

それで先生、16年に助教授になられて、そのとき、僕は東北大の1年に入ったんです。いま思えば、先生が助教授になられて最初の講義なんですけれども、そのときの米沢助教授はどういう講座だったんですか。講座というのは必ずしも……。

米沢　助教授は、どういう講座に所属するというようなことはあまりはっきりしていなかったと思うのです。

三潴　主任教授はだれで、その下に米沢助教授というのでもなかったんですね。

米沢　自然科学の方だとみんなそうだけれども、こっちはいわゆる不完全講座というのが多いものだから、結局教授だけの講座が多くて。だから、助教授は別に何人か採れるということになって、それに該当したわけですから、所属があまりはっきりしなかったんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いまだと、東北大の名簿があると、講座所属みたいのが、一応名簿の上でははっきりしていますけれども、われわれのころは、どうもそういうのはあまりはっきりしなかったように思うので……。

広田　予算上、幾つかのポストが認められて、その都度科目を設定するのは、大学の自主的な判断にゆだねられていたんでしょうか。

米沢　そうだと思います。

三潴　統計学について本格的に伺う前に、ちょっと流れだけ簡単に伺ってしまいますけれども、昭和24年に経済統計学講座ができて、先生がそこの主任教授になられるあと、ずっと東北大に定年までいらっしゃるわけですけれども、その間に、イールズ事件の昭和25年の年に、末永茂喜先生が統計局からいらっしゃいますね。

ちょっと余談ですけれども、末永先生は教育大に引っ張ろうと思いまして、失敗しちゃったんです。それで母校というか、もとの職場の東北大にまたいらっしゃったんですけれども、その末永先生は、統計局の経済部長からいらしたと思うんですが、米沢先生との関係でいえばやっぱり東北大に来られてからのおつき合いですか。

米沢　全くそうです。

三潴　それで末永先生自身は、学史かな。

米沢　経済学説史を経済学史といいましたが、その担当で、私が研究室に入った年から講師で講義をされたわけですから、研究室で同僚というわけではすでになかったわけです。

三潴　末永先生がやめられたのは、宇野先生に殉じたみ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

たいなかっこう……。

米沢　そこいらが、ぼくらにもちょっとわからないんです。

三潴　宇野先生は、君はやめる必要はないんだとおっしゃった。けれども、末永先生はやめちゃったというのをどこかで聞いたような感じなんです。

米沢　本当にご本人でなけりゃわからないと思うけれども、戦争たけなわで、やっぱり一高関係の親しい友人に引っ張られたというように、私らは受け取っています。だから、そのときに、宇野先生でも健在だったら、「いや」といって断られたんだろうが、ちょうどそういう誘いがあったし、こっちは宇野先生もおられないし、そういうようなことで、両方が原因みたいなことで行かれたんじゃないかと思うのです。

三潴　行かれたって、どこへ？

米沢　何か調査機関みたいなところへ……。

三潴　それで戦後、統計局の経済部長から東北大へ末永先生が来られて、当然、統計の米沢先生と仕事の面では同僚ですから、交流もあるんでしょうけれども、末永さんは統計局の経済統計の責任者だったわけですね。そういう意味では、米沢先生にとってずいぶん有益でしたか。

米沢　それは、はっきりいえばあまりなかった。末永さんを再びお迎えしたのは、すでに長谷田さんが亡くなって、むしろ財政学をやっていただくということだったんです。つまり経済学史の方は、玉野井（芳郎）君という方が、すでにやることになっていたものだから、むしろ財政学がなくて困っていたわけだから、それで末永さんに財政学をやってもらえるかどうか、ずいぶん危ぶんだ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

んですけれども、何とか説得して来ていただいたというのが、本当のところです。

三潴　末永先生はもちろん統計の専門家ではないわけだし、たまたま職場が統計局だったという程度かもしれませんね。

米沢　おそらく戦後になってから、統計局へ入られたんじゃなかったかと思う。

三潴　鮫島（龍行）さんや何かとの関係じゃないかと思います。

広田　ちょっと戦争中の話に帰りますけれども、終戦の年まで法文学部では講義はできたんですか、学生がまだ残って。

米沢　かなり押し詰まるまでは。

広田　勤労動員や何かで……。

米沢　学徒出陣でもって学生はほとんどいなくなったんだけれども、幾らかは残っていたわけなんです。それはどういうのがいたかというと、つまり少し年取った学生で、徴兵検査を受けて不合格だったというような学生が何人かいました。

広田　女子学生なんかもいたわけですね。

米沢　経済にはいなかったと思うのですが。

三潴　中国学生というのが……。

米沢　中国だの台湾、それから特に満州国の学生、そういうのがいたわけですね。そういうのを教育しなければいかぬというので、そのための授業をやった記憶がありますね。

広田　法文学部の教室は、たしか空襲でも焼けなかったん

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ですね。ずっと正常に大学の授業が続けられたわけですね。

米沢　もっとも、木造の部分は焼けました。だから、大部分焼けたといいますか、木造が多かったですから。戦後は、残った一応コンクリート建てだったところをまず使って講義が再開されました。

三潴　1番教室なんかは残ったわけですね。

米沢　だから、終戦後の最初は、いまでも記憶していますけれども、むしろ自然科学の学生なども全部集めて、あそこで講演形式で講義をやったということがあります。終戦直後ですが、おそらく昭和20年の10月、11月というころでしたけれども。

三潴　いまちょっとお話に出た女子学生は、東大なんかでは入れなかった。中国関係の学生がわりあい多かったですね。ぼくらのときもそうでしたけれども、特に中国関係の学生が多いというのは、何か理由があったんですか。

広田　当時の文部省の方針だったんじゃないですか。東大は知りませんが、一高には大量に来ていました。

米沢　一高には、特設予科があったんです。

三潴　大学で、東北大にかなりいたんだと思います。

広田　やっぱり大東亜共栄圏の指導者を養成するというような文部省の方針があったんじゃないですか。

米沢　特設予科というのを1年やると、全国の高等学校へばらまかれたわけですね。それはどういう方針で決められたのか、ちょっとわかりませんけれども。

広田　語学教育や何かもやったんでしょうね。

米沢　もちろん特設予科というのは1年間だったですか

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ら、日本語教育が主だったようです。1年間終えると、方々の高等学校へばらまかれたわけです。

三潴　彼らは、やっぱり正規の学部学生で入っていたんですか。昭和15、16、17年ごろ。

米沢　だから、高等学校をちゃんと終えれば大学の正規の学生です。

三潴　いわゆる本科生だったわけですね。

米沢　そうですね。だから、やっぱり東北地方の高等学校に来ていた人は、東北大学に入るというようなことで本人の志望などはどの程度考慮されたのか、ちょっとそこいら辺はわからないけれども、そういう関係で比較的多かったんじゃないかと思います。

広田　ところで、当時ですから、主としてドイツの社会統計学派の勉強をということだったんだろうと思いますが、同時にアメリカの景気予測だとか、そういうようなものもかなり日本に紹介されていたんじゃないかと思うんです。そういう方は、ご自分で取り寄せてご勉強なさったわけですか、ミッチェル（W. C. MITCHELL）とか。

米沢　やはり、あれは非常に興味を持ちましたね。パースンズ（PERSONS）の景気指数というか、どういうふうにつくるとか、そういうふうなことは自分でかなり勉強したというか、興味も持ったから。

広田　ワーゲマン（WAGEMANN）の紹介をなさっておられますね。これはドイツではあるけれども、やっぱり景気予測の……。

三潴　それでいまもちょっと話題が出ましたけれども、先生の場合は有沢先生の講義を聞かれて、いってみれば

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

個人的な指導なり、接触なりはあったんだけれども、かなり独学でといいますか、ちょっと言葉は不適当ですが、米沢先生の場合は、それでかなりご努力なすったと思うわけですけれども、やっぱり有沢先生が、主として包括的指導者というか、そういうことですね。

米沢　そうです。

三潴　しかし、個々の問題については、一々有沢先生がそばにいらっしゃるわけじゃないから、かなり先生ご自身が模索といったら失礼かもしれませんけれども、そういう開拓をなすった。それはずいぶん大変だったんじゃないかと思います。ぼくらの場合は、諸先生がいらっしゃるから、大体何を読むかなんていうのは見当がつくわけですけれども。

米沢　そうですね。最初の「国民所得」の論文なんかは、原稿を全部有沢先生に目を通していただいたりした記憶がありますね。いろいろアドバイスを受けました。

広田　それが昭和11年（1936年）ですね。

三潴　その次の「統計的世界像の輪郭」というのも同じ年なんですけれども、これは拝見したことがあるはずなんだけれども。

広田　ぼくは拝見したことはないんだけれども、「国民所得」と「ワーゲマン」とは、いまなかなかないですね。立教にも戦前の『経済学』（東北大研究年報）はないんです。

三潴　これは、先生がその後たくさん本をお書きになった中には、そのものとしては再録なさらなかったわけですね。

広田　ワーゲマンのは"NARREN SPIEGEL der

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

STATISTIK”ですね。

三潴　ワーゲマンのあれは翻訳ないね。

広田　あれは非常にむずかしいドイツ語で、しかも、ワーゲマンという人は、大変ペダンティックな人ですね。

三潴　講義で先生に、”NARREN SPIEGEL”の話は伺ったような気がする。

その次が需要曲線とか、国民所得とかその辺の、いきなり統計プロパーになるよりは、国民貯蓄とか、そういう論文を、最初のころ、先生わりあいたくさんお書きになっていますね。

米沢　やっぱり有沢先生にいわれたような気もします。国民所得みたいなものがわかっていないといかぬというようなことは、いわれたような記憶があります。

自分の興味としては、むしろ3番目の需要曲線なんかのことをちょっとやりたいと思ってやったわけで、何か両てんびんをかけたようなことをやって、結局、成果が上がらなかった。

三潴　あと、そのころ先生は、ずいぶん工業統計というか、工業経済というか、そういう論文がずっと並びますね。地域工業といいますか。

米沢　それについて、最近出たばかりなんですけれども東北学院大の産業経済研究所というのが前からありまして、ようやく紀要みたいなものが第1号というので出たんで、それに何か書かないかといわれて、それを書いたんです。

それに書いておいたんだけれども、抜き刷りの9ページの段落の（二）に書いてあることが、大体該当するわ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

けです。

三潴　その報告書を、先生がお書きになったわけですね。

米沢　ええ。

三潴　そうすると、有沢先生もやっぱり工業経済の方に興味を持たれていたんでしょうか。

米沢　そうだと思います。

広田　地方工業化というのは、戦争との関連で、工場を地方に分散するとか、そういう大きな方針がありましたね。その一環として、各地方の工業をもっと研究しなけりゃいけない。そういう文脈なんでしょうか。

米沢　ただ、最初のころは昭和14年ですから、まだ戦争との関係はあまりなかったと思います。やっぱり東京、大阪にあまり集中し過ぎたのを、直さなきゃいかぬじゃないか。諸井貫一さん自身も、そういう主張は持っていたと思います。

広田　米沢先生の場合には、最初から工業統計の府県別というところに興味を持たれたというか、そういうところから勉強されたわけですか。

米沢　まあ、そうですね。

広田　どうもぼくらはつい生産の定義がどうだとか、そういう方から入っていくんで。

三潴　非常に具体的にというか、地道にというか……。

広田　普通、東京にいると、府県別は見ないものですね。

三潴　そうですね。だから、先生の場合は、統計学の話といまの工業統計の話の両方伺いたいから、話としてはやっぱりそれを2つに分けて、だんだんお伺いしようと思うんですけれども、そこに入る前のことで、広田さん、何かもう少し……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　またちょっと前に返るかもしれませんが、ワーゲマンの紹介をされたりしたころ、計量経済学というのはまだあまり日本には入ってきていないと思いますが、まだみんなが注目するというほどではなかったんでしょうか。「エコノメトリカ」は、いつごろ創刊されたんですか。昭和8年ぐらいですか。

米沢　そうだと思いますから、むしろ、この3番目の論文などについては、やはり計量経済学という名前を使ってあったかどうかはよく覚えていませんが、そういう方向は、かなり念頭にあったわけですね。結局これは需要曲線を一生懸命に導き出しても、それだけではあまり意味がないという批判的な扱い方だったと思いますけれども、少なくともそういう批判の対象や何かとして、計量経済学というものは意識していたと思います。

広田　ヨーロッパでも需要曲線の問題については、ラグナー・フリッシュ（RAGNAR FRISCH）でしたか、「需要曲線、供給曲線測定のピットホール（落とし穴）」というような論文があって、結局何をはかっているのかわからないじゃないかというような――昔、勉強したことがあるんですけれども、日本でもそういう論文が紹介されて、当時から問題にされていたわけでしょうか。

米沢　それはそうだと思います。

広田　そのほか、英米流の経済統計論の書物なり、人なんかで、よく読まれた、影響を受けられた方は、たとえばどんな方ですか。

米沢　英米人じゃないけれども、フリッシュの物価指数論だのああいうのは、なかなかむずかしくて、あれは何年でしたかな。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　「エコノメトリカ」に載った論文ですか。戦争中だったと思います。

米沢　"ANNUAL SURVEY OF GENERAL ECONOMIC THEORY: THE PROBLEM OF INDEX NUMBERS"、こういうものはかなり注目したですね。何年だったか、かなり古かったように思います。

広田　私たちは、戦後進駐軍が持ってきて、それが東大の図書館に寄付されまして、それを手で写して勉強したものです。ほかになかったんです。それは1つの画期になった論文ですね。

米沢　こういうものには、注意はしましたね。どれだけ理解したかはわからないけれど。

三潴　いろんな地域工業とか、そういうことをなさっている間に、ローレンツ曲線なんかもそうですけれども、所得分布とかそういうことにも、先生は幾つかの論文をお書きになっていますね。やっぱりそれは、工業統計から入られた延長線上なんでしょうか。

米沢　国民所得の方は、どっちかというとマクロ経済に使うことが主だったわけだけれども、昔から汐見三郎さんなんか分布の方をずいぶんやっていましたし、そういう論文がかなりありました。やっぱりローレンツ曲線を使うということは考えていたわけですが、実際に使ったのは、それをむしろ工業の地域分布の分析に私自身は使いました。だから、そこいらのところをやっぱりいろいろ考えながら、私なりにやったとは思っているんです。

広田　米沢先生のご本を拝見して一番感ずることは、かなり数理統計学的なんだけれども、テーマの設定がやはり経済分析ということから出発して、そこにとどまらな

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いて、数理的にも非常に緻密に展開される。そこの部分だけを見ると、大変数理統計学的だけれども、普通の数理統計学の教科書とは構成が大分違っていることを、まさに特徴的なことだと思うんですけれども。先生ご自身は、その点どういうふうにお考えになりますか。決して確率から出発していかないですね。

米沢　やはり社会統計といいますか、社会現象を扱う場合の必然的な方向なんじゃないかと思います。どうしてもそうならざるを得ないんじゃないでしょうか。

三潴　やっぱり工業統計というか、工業経済に触れられたということは、米沢統計学においては、相当重要な意味がありますね。ただ、いわゆるマル経を勉強なすって、それから統計に進まれたというのとはかなり違っていていま広田さんがいったように、具体的な工業という対象物があって、それを統計的に処理する。もう1つその背景にはマル経というか、簡単にいえばそういうものが重なっているから、いま広田さんがいったようにユニークなそういうのが重層的な関係ですね。

広田　と思いますね。経済分析で問題が設定されて、それを技術的な意味での統計方法に問い返す。それはあまりやられていないことですね。

他方では、統計方法をかなり抽象的なところから発想して、形式的体系化にだけ……。

三潴　それはそれで、完結しちゃう人が多いものね。

広田　完結した数理統計学の体系みたいになってしまうと、おもしろくない。

三潴　全く無味乾燥な数学になっちゃうから。

広田　それが、米沢先生のは経済の方から問題を出され

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

て、それを必ず技術のところまで、方法のところまで具体化するといいますか、問い返すということを、必ずやっておられるわけなんです。そういう人は、あまりいらっしゃらないんじゃないかと思うんです。

三潴　これもぼくの印象ですが、先生が副手から助手になられるときに、やっぱり統計をやろうと、その段階でかなり決心を固められているんだけれども、実際に論文を書かれているときには、統計プロパーの問題じゃなくて、大変具体的な国民所得なり工業統計なりに触れられている。普通いまだったら、統計やるとしたら、統計の学問論か集団論か何かまず書いちゃうでしょう。それをやられないところが、やっぱり非常にユニークな気がするね、架空の研究じゃなくて。

広田　国民所得の推計ということは、当時、統計局の推計が出てくるとか、いろいろな学者の推計もあったりして、1つの共通のテーマではあったんですね。

三潴　統計学プロパーの方法論、統計学ずばりではないでしょう。具体的な国民経済というものがあるんだから。

広田　非常に具体的な経済統計の問題であるわけですね。

三潴　だから、先生が統計学をやろうと決心なさったときに、やっぱりもうかなり経済統計だったわけですね。

広田　そう思いますね。出発点がそうですね。

三潴　だから、講座名が、さっきぼくが「経済統計」だったんですか、「統計学講座」ですかと伺ったんだけれども、先生の場合は、当然「経済統計学講座」でなければならなかったんですよ。それは本当にそう思いますね。

広田　蜷川先生も最初に書かれた論文は「経済統計論の性質に関する一考察」という論文なんで、やはり物価指

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

数論だとか、時系列解析の問題なんかの論文が、初期にはあるんですね。それがだんだん方法論として純化するというか、体系化する方向に行かれたように思いますが、それはそれで、理論的には非常にすぐれた、画期的な意味を持っているんだけれども、さて現在それを経済統計の分析に生かすというときには、やはり問題が残りますね、抽象化しただけに。

三潴　いままでのは、先生の経歴みたいなことが多かったんですが、いよいよ本論というか、統計学と工業経済統計のことをお伺いしたいと思うんです。

先生の著作目録の順序でいえば、最初にお書きになったのは『工業経済統計』なんですけれども、それはちょっと統計プロパーではないんで後回しにして、『統計の諸問題』という茶色の小型の本ですね。あれは終戦直後というか、1946年（昭和21年）ぐらいに実際にお書きになって、本が出たのは1947年の4月ですけれども、序文なんかは46年になっているんですよ。ですから、本当に終戦直後にお書きになったもので、序文なんかでも、「統計の暗黒時代は去って……」というような内容なんです。

あの本は、もちろん全部書きおろしでしょうけれども、非常に早い時期に、まだ統計の改革以前、もちろん統計法のできる前だし、あの時期には、やむにやまれずあの小さな本をお書きになったという感じがぼくにはするんです。戦後の統計の明るい時代が来たというので、とにかく何か書かねばという感じを、あの本から受けたんです。

米沢　まさにおっしゃるとおりなんですよ。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　ということは、暗黒時代には、先生自身が統計学の勉強でも不自由をなすったというか、工業統計だって発表されなくなるし、いろんな意味でずいぶん不自由な研究生活だったわけですね。

米沢　そうです。『工業経済統計』が発刊されたのが、終戦の年の3月で、発行所でだいぶ焼けてしまったそうですけれども。だから、書く内容もいろいろ制約されていましたし、後で玉野井さんによくやられたんだけれども、序文なんかに少し時流に迎合したようなことを書いたって。

三潴　ぼくは、それは絶対ないと思いますよ。一番最初の著書だから、きょうも出がけに読んだんですよ。もちろん、ドイツのことなんか書いてありますけれども、そういうことは全然ないですね。

広田　当時の状況の中でね。

米沢　そういうことがやっぱりあったわけだから、それがなくて本当に自由に書けたというその気持ちをまずあらわしたというか、そういうことなので、おっしゃるとおりですね。

三潴　あれを拝見して、非常にひしひしとそれを感ずるわけなんです。ただ、あれは仙花紙のような、裏がすけるような悪い紙で出版された。

それから何といっても本格的なのは、こっちのメモの方に書きましたけれども、わざと順序不同にしてあるのは、河出の『統計学』が、先生の一番最初にまとめられた統計学の体系ということになるんだと思うのです。

それで、ちょっとぼくの個人的なことを交えて悪いんですけれども、私が昭和16年に先生の助教授になられた

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

最初の講義を伺って、そのノートがいまどこかにあるらしいんだけれども、やっぱり記憶に鮮明なのは、学説史を非常に一生懸命講義していただいたという記憶がかなりある。それもいまや断片的なんですけれども、ジュースミルヒが出たときに、これは「甘い牛乳」だといって米沢先生にしては珍しくユーモアをおっしゃったのを覚えているんです。(笑)

それから「スタティスチック」(寸多智契)という杉亨二の奇妙な字、あれも米沢先生の黒板の字で、いまだにぼくはよく覚えています。

ジュースミルヒにしても、杉亨二の「スタティスチック」にしても、いずれも歴史というか、学説史というかそれからワーゲマンのナレンシュピーゲルの話もそうだし、ぼくは統計学は熱心じゃなかったんで、当時大体は忘れちゃったんですが、いま考えてみてもそういう講義だったと思うんです。

したがって、河出で出された『統計学』も、もちろん有沢先生について勉強なすった影響がずっとあるんですけれども、前に先生の定年のときに先生を囲む座談会で「社会主義経済学の統計学というのはどういうのか」とだれかが質問していました。それは、別にただ河出の本のシリーズ全体のタイトルで、別に米沢先生の統計学か社会主義統計学ということではないので、内容を見ればそれはすぐにわかると思うんです。

やっぱりこの本でもそうですし、その後、先生が何冊か本をお書きになって、一番最近のは『経済統計計量分析』というのでもそうですけれども、一貫して統計学の学問的性格についても、基礎的な考えは、河出の『統計

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

学』でも、ぼくが講義で伺った方法論、あるいは補助学という言葉が、1972年の『経済統計計量分析』の中にも継承されている。1本筋として通っていると思うわけです。

したがって、米沢先生の統計学というのは、最初の1948年に書かれた河出の『統計学』で基礎が築かれて、もちろんその後出される本には新しい研究がつけ加わるんですけれども、基礎的には、がっちり土台がおできになっていると、ぼくは感じるんです。米沢先生にとって、この河出の『統計学』の処女出版は、どういうふうにお考えでこの本を書かれたか、ちょっと伺いたいと思うんです。

終戦直後の『統計の諸問題』はボリュームもそう多くないし、それとはちょっと違って、やっぱりこれが一番まとまったものだと思うんです。

米沢　これはさっきもお話があったように、それ以前に発表した論文は、非常に個別的な話題というか、そういうものだったわけだから、やはり統計学の体系についても、少なくとも講義を始める段階からは、そういう方面にも力をかなり傾注したわけです。

それについては、やっぱり有沢さんの統計学の講義の影響などが非常に大きい。いま三潴さんに指摘されたようなことは、やっぱりどうしても恩師の講義のタイプに倣うというか、そういうこともあったと思います。

それから、この河出書房の本については、やっぱり有沢先生とか、高橋先生とかが、むしろ統計学なら執筆されるのがよかったんじゃないかと思うんだけれども、それぞれ別の巻を執筆されたためでしょうか、結局、統計

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

学は米沢に書かせろということになって、回ってきたんだと思うのです。

三潴　これは、有沢先生からの慫慂ですか。

米沢　だったと思います。それで、やはり、こういうチャンスを受けとめた方がいいと思って、自分なりに相当一生懸命書いたつもりですけれども、まとまった本を書くのは、その前の『工業経済統計』というのはありましたが、それとはまた内容も違うんで、かなり苦しかったという記憶はありますね。

三潴　河出のは、いま研究室に置いていらっしゃいますか。

米沢　ここにはちょっとないかもしれない。家にはあります。

広田　私も統計学の講義をすることになって、拠るべき本がなかなかなくて、先生のこの『統計学』と、森田(優三)さんの『統計学汎論』の方ですね、よく使わせていただきました。いまでもときどきあれを出しては繰り返して見ています。

三潴　これは、当時版を重ねましたでしょう。

米沢　ええ。

三潴　ちょっと戻りますが、先生が一番最初統計学の講義をなすったのは、1939年の講師になられたときですか

米沢　そうです。

三潴　そうしたら、ぼくは、先生の3回目の講義を伺ったことになる。昭和16年。

広田　この河出の『統計学』では、いまいわれたように統計学史から始めるということではたしかないですね。

三潴　そうですね。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　もっと理論的な総論から始まっている。

米沢　学史の部分もかなりありました。

広田　有沢さんのは、完全に学史から始まっている。

三潴　先生の統計学の体系的な教科書としては、その次には『経済統計学の展開』という勁草書房のがございますね。これでも、さっきちょっとぼくがコメントしたように、河出で書かれた統計学の基本的な位置づけは、もちろん変わっていないわけなんですけれども、河出の『統計学』と勁草の『経済統計学の展開』とは、先生の意図としてはどういう点で違っているのでしょうか。

米沢　幾らか成長したというか、そういう成果をまとめてみようという気持ちはずっとあって、それがこういう形で実現したということでしょうが、あれには学説史みたいなものはあまり書いてないんで、ちょっと言葉は悪いけれども、自分の、借りものではないようなところをあらわしてみたいというような気持ちもあったと思うんですね。

三潴　河出との間に『工業経済の基本問題』をお出しになっているから、さっきも話題に出たように、先生の場合は、統計学と経済実体ということはいつも離れないで、先生の頭の中にあったように思うんです。

その次の、一条（勝夫）君や鈴木光男君も一緒に書いている日本評論社の『講要統計学』では、それまでの河出の『統計学』や勁草の『経済統計学の展開』とはもう1つ違った側面で、いまの一条君やら鈴木光男君なんかを動員なさって、もうちょっと範囲を広げた統計学になっているとぼくは思うんです。これは、あのときに『講要経済学』というのがもう1つ出ましたでしょう、姉妹

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

篇みたいに。ですから、教科書ですね。

米沢　新制大学になって、教養部の方でむしろ一般統計学とかそういう講義ができて、それのテキストとしてつくられた。もっぱら実用的というか、そういう意味でつくったんです。

三潴　ですから、前2著とはちょっと性格が違うのは当然だと思うのですね。もちろんそれもあるんですけれども、やっぱり先生のお考えの中に、新しい分野というか鈴木光男さんなんかがやっているそういう分野も、統計としては、だんだん守備範囲を広げていかなければいけない。そういう積極的なお考えも、もちろんあったんじゃないでしょうか。これはちょっと推測なんですけれども。

米沢　確かにありましたね。

三潴　先生がちょっとおっしゃった教養部の統計学を先生は非常に情熱を傾けてというか、座談会では先生の使命感ということが書いてあるんですけれども、教養部と学部と両方、統計をずっとお持ちになっていたわけですか。一条君が途中で来るわけでしょうけれども。

米沢　あとで一条君に任したわけですけれども、最初は私がやりました。教養部が遠くにあったときには富沢まで出かけたりしましたし、学科制度なんかつくるときにいわる教養科目にどういうのを入れるかというのは、委員会みたいなのができたりした記憶があります。私がどういう資格で入ったんだったか、ちょっと記憶がはっきりしないけれども、やっぱり教養科目として統計学をやったらいいということは、かなり主張した覚えがあります。そういう責任を果たすという意味もあったと思いま

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

す。

三潴　どこの国立大学でもそうだと思いますけれども、一般教養の統計学をどのグループに位置づけるかというので、たしか人文、自然、社会という3グループがあるんですね。それで社会科学の系列の中に統計学があった。

米沢　東北大ではそうしたんですね。ほかでは、自然科学に入れたところが非常に多いんですね。

三潴　それで、いまおっしゃるように、東北大ではやっぱり社会科学の系列の中に、もちろん経済学もあるわけだけれども、統計学を入れるというのは、先生の積極的な主張があったんでしょうね、自然系列じゃなくして。

米沢　それがどういうふうに受け入れられたか、そこいらはちょっとはっきりしないんですけれども、多少は私の主張が受け入れられたという面もあると思いますね。

三潴　ダイヤモンドの『統計学の基礎知識』でも、日本評論社の『経済統計計量分析』でもそうなんですけれども、『講要統計学』で統計学の範囲を云げられるときに、予測という問題は本当に考えれば非常にむずかしい問題だと思うんですが、統計学の分野に限定して考えた場合でも、予測というのを先生がどうお考えになっているか。ちょっと漠とした質問なんですけれども。

米沢　具体的にはそういうことも書かなきゃいかぬとは思っていながら、そこまでは筆が行かなかったのが事実じゃないかと思います。

三潴　あれは、たしか鈴木君の補論のようでしたね。『講要統計学』の方では、鈴木君はどういうところを書いていたんでしたか。『統計学の基礎知識』は、もちろん先生が全部お書きになったわけですけれども。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　その部分は鈴木君のものに基づいて書いたと、序文でも断っています。

三潴　ぼくの質問は、意思決定論でもいいんです。ある意味ではこれがいま非常に脚光を浴びているわけですね。そういうところにずっと視野を広げられるときに、方法論科学とか社会科学的な統計学というのと、どこに接点を置かれたのかということを質問しているんですけれども。

米沢　正直いってそこいらのところは、現在に至るもまだ解決していないというか、それこそ将来、むしろ若い研究者にその解決をゆだねるというところで終わっていると解釈していただいていいと思います。

三潴　もう1つ、先生の『統計学の基礎知識』のところで大きな柱になっているのは、方法科学として位置づけられるというところ、やっぱり集団論をきちんと評価なすっていると思うんです。ご承知のように、集団についてはそんなの要らないんだという論者も、経統研の中にもおりますね。ぼくはやっぱり集団というのは、非常に重要な概念だと思っておりますけれども、集団否定論に対しては、やっぱり先生はそれはおかしいじゃないかとお考えになるでしょうね。

米沢　ええ、そう思いますね。

三潴　よく日銀券の発行高は集団じゃないとか、同じような例をよくいうんだけれども、こういう特殊な例ではないんでしょうが、何かそういうものを1つ出してきてこれは集団じゃないからというふうなことで、議論が空転しちゃっているようにいま思うんです。その点は、ほ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

くは先生のお考えで納得しているわけです。

それから補助科学とおっしゃる場合も、日本評論社の本でも、経済学の外に統計学があるとまでお書きになって、かなりますますはっきりと補助学的な――ぼくが伺った講義でも、補助学というのは記憶にわりあい残っているんです。やっぱりそれは方法論とおっしゃるのと、ほとんど同じ意味でしょうか。

米沢　全くそうです。つまり経済学と肩を並べるようなものじゃなくて、むしろそれを補助する科学だというような考え方ですね。

三潴　その場合に、これはずっと後の話になっちゃいますけれども、ソ連の統計学論争で広田さんなんかが本を出しましたが、あそこで対象と方法という問題でいろいろ議論がありましたでしょう。その場合の経済学の対象としての実体と、それを分析するツールとしての方法とある。先生の補助学あるいは方法学という場合、対象に規定された方法ですね。

米沢　そうですね。対象そのものじゃないけれども、ただ、いかなる対象でも全く同じ方法が適用されるとか、そういう機械的な理解はしてないつもりなんですがね。

三潴　もう1つ、これもむずかしい問題なんですけれども、統計的方法を適用する対象は、自然現象にも社会現象にもあるという一般方法論的な考え方がございますね。ところが、経統研の諸氏なんかになると、それに異論を持っている人もいるわけで、自然科学における統計的方法と社会科学、経済科学における統計的方法は、オーバーラップするようなところもあるし、全然違う側面があるということでしょうか。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それとも、そもそも対象が異質なんだから、方法もそれに規定されて、表面上は似ているようだけれども、異質なんだというふうにお考えになりますか。

米沢　なかなかむずかしい質問ですね。(笑)

三潴　先生の講義を聴くつもりになっちゃって。あんまり形式主義でやるのも、ぼくはいいとは思わないんですけれども。

米沢　やはり共通な面もあっても悪いことはないと思うんですがね、私は。だから、同じような解析方法みたいなものは、適用されていい場合も、かなりあると思います。しかし、共通でない面もあるんだ。

三潴　その場合に、無限集団とか有限集団という問題がありますね。それが自然現象と社会現象の場合に、いきなりパラレルにくっつけていいかどうかは問題だけれどやっぱり歴史的な有限集団と歴史性のない無限集団ということが、その裏側に、基礎にあるんですね。

米沢　それはあると思いますね。

三潴　その場合に、またさっきの予測の話になっちゃうんですけれども、だんだん統計学の範囲が広がってきて具体的な統計の資料体系を考える場合に、主として近代経済学的な考え方が非常に強いから、そこで予測を伴わない統計分析はナンセンスだというふうにまで増山さんあたりだったらいい切っちゃうわけですね。もちろんそんな考えには、先生は賛成なさるわけはないんですけれども、それにしても、予測というものを取り込まないと先生のお考えになっている統計学は完結しないのでしょうか。つまり、予測に一定の地位を与えないといけないとお考えになりますか。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　集団というものは、別に予測を含まないで、現在目の前にある集団を記述することについても、いろいろ特別な方法、手段が必要なんで、そこのところがむしろ大事なんじゃないか。場合によったら、そういうものを予測にも転用するというか、適用できるというふうに考えていいのではないかと私は思います。

三潴　先生は、「記述統計学無用論への反論」というのを1節に立てて、『統計学の基礎知識』の中でお書きになっている。そういうのを拝見すると、米沢先生の場合に、予測とか、意思決定という方も取り込まなければいけないとお考えになりながら、しかし、やっぱりあるときになると、記述統計学がもっと基礎的に重要視されなければならないというように、一歩踏みとどまるという、そんな感じがするんです。

米沢　確かにそうなんです。だから、そういう点で非常に首尾一貫しないといわれれば仕方がない。

三潴　いや、全く逆の意味で申し上げているんです。

広田　新しいものの研究にどんどん発展していかれるが、従来の基本線みたいなものを崩さないという意味です。新しいものに飛びついていくと、前のを忘れてしまうような人がいるんですが、それでは前のと首尾一貫しないことになっちゃう。

三潴　だから、米沢先生の還暦の座談会では、その辺のところの先生に対する質問は非常に不十分で、米沢先生というのはいつでも新しい問題意識を持たれて、次から次へと展開されるとなっている。それはそうなんだけれども、それでは米沢先生の評価は中途半端である。ちょっと米沢先生の評価は違うんじゃないか。しようがない

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ことなんだけれども、竹内清さんの質問でも、森田先生も有沢先生も同じようになっちゃうけれども、米沢先生はそれを基礎に勉強なすったという。ぼくはそうではないと思う。

もう1つ、ぼくは先生の統計学の中で、メモに「資料論、調査論」と書いたんですけれども、社会統計学の場合は、調査論と解析と車の両輪というふうに先生もお書きになっているし、そういうことをいう人は、非常に多いと思うんです。特に「資料論」という表題でいろんな著書の中に書かれているときに、ただ調査論を重要視するのとは、もうちょっと意味が違うのかなと思うんです。

といいますのは、統計をつくるのは国家や自治体が多いわけだから、ただ調査論を重要視せよというよりは、人の手でつくられた資料の分析、位置づけをきちんとしなきゃいけない。それは、おそらくは先生が工業統計を使って、最初のころ、先ほど話題に出たいろんな地域の工業のことを論ぜられるときに、まさに資料を使っておられるので、ぼくらが観念的に調査論は大事だというのとは、資料論を展開されるのは、少し重点の置き方が違うというか、もっと地道な、調査論とは違った側面があるような気がするんです。それはちょっとぼくの勝手な解釈でしょうけれども。

たとえば、『経済統計計量分析』で、「資料論的課題」「統計資料の体系」でしょう。普通ぼくなんかはやっぱり経済統計の体系という言い方をする。資料体系というのはそうは――いっている人もいるけれども。ぼくは、先生が調査論を重要視なさるということは、具体的には資料論だと思うんで、特に「資料論」とか「資料」という言

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

葉をご自分で出されるのは、先生のお考えの中にそれなりの意味があると思うんですよ。そういう質問です。

米沢　やっぱり、いろんな統計に関する実際の仕事をやっていて、そういうふうに思い当たったというか、そうだと思いますので、その点は、それなりに評価していただきたいと思います。ただいろんな資料を積み重ねておけばいいということにはならない。それをむしろ大いに活用しなければいかぬわけですし、それが統計学の課題にどれだけ入るか。そういう点、まだ考えが熟してない点も非常に多いと思うんですけれども、そういうことを感じている反映が、そこにあらわれているんだと理解していただいていいと思います。

三潴　その場合に、「統計の背後にあるもの」で、資料体系の整合性、そこで国民経済計算という1つの体系があるわけですね。先生がお考えになる統計資料体系と国民経済計算の――あっちは計算体系なんでしょうけれども。しかし、計算体系に必要な資料体系というのも、当然考えられる。それは先生にとっては、イコールではなかろうとぼくは思うんです。新SNAと資料体系との関係なんかは、どんなふうにお考えになりますか。

米沢　ちょっと簡単にいい過ぎることになるかもしれないけれども、国民経済計算みたいな問題を統計学の対象としてどこまで包括したらいいかということは、従来はあんまりはっきり議論はされてないと思う。私もはっきり議論したわけではないけれども、そういう点をもう少しやらなきゃいかぬということをいわせてもらっているというか、そういうふうに理解していただいていいんじゃないかと思うんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ですから、ちょっと、新SNAがどうだのそれ以前のものがどうであるかということは、あまりまだ考えていないというか、ただ、ああいったような問題がどういう形で統計学の対象となるか、そこいらのところをもう少しきちんとしておかないと、統計学の対象がいたずらに広くなり過ぎるというおそれもあるし、それこそ整合的でなくなるという心配もあるんじゃないかということなんです。どうもお答えになっているかどうか……。

三潴　いいえ、ぼくもそういうふうに理解するんですけれども、ぼくがそういう話題を先生にぶつけたのは、資料体系の整合性ということで、国民経済計算体系が一番整合性があるんだという主張を一橋なんかの連中が非常に声高らかにいうわけです。だけど、先生ご承知のように、国民経済計算の基礎になっている経済学というのはマルクス経済学ではないわけで、そういう1つの、簡単にいえば近代経済学、ぼくは勉強していませんが、具体的にはストーンらしいのですが、そういう人たちの立てた資料体系は批判の対象にはなるんだけれども、先生がずっと構築されてきた統計学の資料体系とは違和感があるんじゃないかという感じがするんですけれどもね。

米沢　そこのところは、別にマルクス経済学だから、たとえば剰余価値を生産しないものを全部度外視するとかそれを貫くべきだというところまでは私は考えないんでむしろその近経的な考えでやるんなら、それで一貫して資料体系を求めればいいわけだし、もしマル経で一貫するなら、それに即して資料体系を挙げればいいんじゃないか、どっちつかずじゃ、もちろんいけないけれども。そういう意味で整合性を保たしめればいいように一応理

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

解しているんです。

三潴　おそらく先生のおっしゃる整合性と、新SNAの人たちがいう整合性というのは、意味が全然違っているんじゃないかと思うんです。彼らのいう整合性というのは、要するに複式範記の発想の整合性ですね。ですから、それは非常に形式主義的整合性だけなんだけれども、先生のおっしゃる整合性というのは、いまご説明になったような意味では違うことは理解できるんです。

と申しますのは、これからの若い人たちは嫌でもそういう問題に直面しなきゃならないと思うんです。これはぼく個人の考えもあるんですけれども、この問題がどうしても1回、いつかは大きな話題にならざるを得ないんじゃないかなと思うんです。

広田　いまもお話が出ましたけれども、国民所得統計、産業連関表、金融連関表などを統合していくということで、新SNAでは、ともかくも形式的には統合され、体系化された。ところが、実質的に少し内容を考えてみますと、統合が進めば進むほど、たとえば産業部門別の分類がだんだん犠牲にされていく。金融統計なんかでは、当然のことですが、貸し出し先の産業分類については、どうしても弱いですから、それに引きずられて、そういうことになるんだと思います。その結果、生産過程の統計表章がだんだんなおざりになっていく。もちろん産業連関表的なものは出てくるんですが、生産についていえば、どうも製品の需給分析というところに焦点がしぼられてくる。それともう1つは、金融面の流動性分析ですね。この2つの方向にしぼられてくる。それはやっぱり近代経済学の経済像の、統計での具体化なんだろうと思

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

うんですけれども、あれだけの推計を役所の力でやってくれるのは、ありがたいことなんですが、内容的には、生産の構造分析には何かないものに、だんだんなっていくという心配を感ずるわけです。

三潴　基礎統計を大事にしなくなるというか……。

広田　逆に、基礎統計をそういう観点から変えてくるわけですね。

三潴　そうですね。だから、たとえばセンサスよりはサンプルで用が足りちゃう、そういうことにもつながっていくと思うし、これは伊大知良太郎さんが何かに書かれていたんだけれども、たとえばCPIをつくるときに、いま家計調査でウエートをつけているんですが、そういうものは要らないんで、コモ法でやればいいんだ、コモ法でいいということになれば、家計分析は必要でしょうけれども、ウエートとしての家計調査は無用の長物になる。何かぼくは、一次統計の荒廃が起こるんじゃないかという気がするんです。

広田　コモ法と、たとえば資本形成の産業別区分、どの産業部門で資本形成が行われたかという意味の産業別ですね、それがだんだん弱くなってくるということは、大いに関係しているわけです。コモ法で推計すれば、資本形成の総額をとらえるという点では、かなり精密になるだろうけれども、経済統計としては、一番大事な点が弱くなる。

三潴　総平均指向型というか、あまりラフにいってはいけないけれども。

広田　やっぱり需給分析だと思うんですね。市場の観点というか、それは業界の要求でもあるわけですが……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　ご承知のように、自治体というか、地域統計にも連関表が導入され、県民所得から始まって、いまや連関表自体をいろいろな自治体がつくるでしょう。ああいう行き方、それ自身一見メリットがあるんだけれども、逆にデメリットもあるんじゃないかと、いま広田さんがいったような観点から考えたんです。

先生は、宮城県で地域の連関表にかかわりをお持ちになったでしょう。

米沢　ええ、ありました。東北大にいたころですけれども、近経の鬼木さんが一生懸命やってくれたりしたんで、あまり私は重要な役割りは演じなかったと思います。ただ、ああいうものをつくることによって、統計のいろいろな整備に刺激になったり、プラスの面もあったと思うので、全然むだ金を使ったというふうには思わなかったです。

三潴　それはそうですね。こういう統計がないということがわかりますからね。

広田　穴がわかる。たしか、私の住む埼玉県にも産業連関表というのがありますから、県ごとにあるんでしょう。

三潴　それはパターンがあって、何しろ国民所得を指導したように、企画庁あるいは行管が、同じパターンを指導するわけです。

広田　今度、新SNAの方式は、県段階で県民所得の推計にも、皆取り入れられるわけです。県の産業連関表を利用して、非常に大ざっぱな推計をやる。

三潴　県知事なんかは、そういうものが必要でしょうね、予測で演説したり、工場を誘致すれば、どういう波及効果があるか、そういうところをはかるのに。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　地域総合開発計画という場合には、ほかによるべきものがないから、結局そういう大ざっぱなものでもという点はあるでしょうね。

三浦　それでは、午前に引き続きまして、始めさせていただきます。さっきの話からもずっとありましたように米沢先生の統計学の場合は、ただ統計学の技術論だけじゃなくて、工業経済というか、経済の実体を踏まえての統計学をずっと進めてこられたわけですが、リストに並べてあります先生の工業関係のご著書というのは、1つは終戦ぎりぎり、それから後、1950年ということになるわけですが、これは私の感想ですけれども、先生の場合は工業経済というのをただ漠然とした工業政策みたいなものじゃなくて、非常に具体的に工業構造の分析を統計的になさっているという大きな特徴があると思うんです

さっきもちょっと話題に出ましたけれども、分類、グループ分けといってもいいんでしょうが、工業構造をそういう観点から統計資料を具体的に使ってどういう構造分析ができるかということを、あるいは部門別に、あるいは工業全体についてなさっていらっしゃる。決して全産業にわたってということじゃなくて、工業に焦点をしぼって、終始一貫して工業をなさっているし、それから論文もたくさん書かれております。

そこで1つ伺いたいのは、統計における分類、あるいはグループ分けの問題を具体的に工業部門に適用をなさっているわけですが、先生が行ってこられた分類とかグループ分けというのは、どういう意味で一貫して取り上げられたのか、そのことをまず伺いたいと思うんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

地域工業の問題ももちろん伺わなきゃならないんですけれども、まず全体のことで少し……。

米沢　やっぱり全体集団だけわかったのでは、情報としては一面的で、結局部分集団について的確なことがわからないと、集団を示す統計として十分じゃないということでしょうね。

それで、その部分集団というものをどういうふうに考えるかということで、何でもないようだけれども、たとえば全国都道府県に分けるというのは、行政区画としては決まっていることだから、そのとおり使えばいいわけだけれども、産業分けというようなことになると、そうはいかないというような点に思いをいたしたというか、実際に統計を扱っていて、そういうことを痛切に感じたということではないかと思います。

三潴　いまちょっと手元にないんですけれども、昭和45年の先生の『工業経済統計』では、たとえば生産量の従業員規模別の分類であるとか、いろんな角度で分類標識を立てては横に縦に切るといいますか、そういうことをたしか3章か4章にわたってなさっていると思うんです。

ただ、このころはもちろん出版とか言論は不自由ですから、いろいろご不自由があったでしょうけれども、分析の手法は、その後もずっとそういうことを貫いておられるし、一番最近の1975年の『日本工業経済論』では、それを主要産業部門別になさっていると思います。

それとまた関連はあるのですが、中小企業、中小工業問題についても、幾つか論文をお書きになっておられるし、それぞれの本の中にあるんですけれども、ご承知のように、有沢先生も中小工業問題については、いろいろ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

お書きになっておりますが、特に地方、地域の場合には宮城県の場合でも、中小工業というのは、ずいぶんいろいろな問題をはらんでいると思うんです。

たとえば賃金格差だとか、生産性の格差だとか、いろいろ企業別格差の問題がある中で、統計の手法とも大いに関係があるんですが、例の標準化計算ですね。これは先生が有沢先生の還暦記念の本にお書きになって、その後もずっとおやりになっておられるのですが、標準化計算と部分集団の分析というのは、総平均を出す場合に、標準化計算をしなけりゃいけないという考え方と、部分集団の比較が重要だということとがどういうふうに絡み合っているか、ちょっと伺ってみたいと思うんです。

その前に、標準化計算を非常に強く、先生がいろいろなところで強調されているんですが、それの一番のきっかけは……。

広田　ちょっと途中ですが、標準化計算に入る前に、もう少し工業統計について……。

最近考えはじめたんですが、経済統計をやる人間は、工業統計をやらなくちゃいけない。何といったって、工業というのが中心ですから。だけど、わりあい少ないように思うんです。農業統計をやる人は多いんですが、というわけでしょう。

この『工業経済統計』という、最初にお書きになった本には、工業統計についての基礎的な方法上の問題、理論上の問題が、かなり網羅的に全部出ているような気がするんですけれども、当時この種の本はあまりなかったんじゃないですか。役所の工業統計のごく簡単な解説的なものはもちろんあったでしょうけれども。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

米沢　本当に、参考書みたいなものはあまりなくて、そういう意味では苦心したように記憶しています。ただ、あのころは、工場統計表とか工業統計表というのがあれば、別に問題ないというようなことだったんじゃないかな。農業の方は、農林省の方から統計が出ていましたけれども、それに比べて、昔の商工省関係でああいうりっぱな、大きな統計表というのが出ているので、これ以上何もいうことないというような風潮で、あまり突っ込んでどうするというような考えはなかったのではないかと思います。

広田　たとえば、工場統計というか、工業構造の統計と、工業生産の統計との区別、及び関連というような問題ですね。特に戦後は、構造よりも生産の伸びが何%かという、生産動態への関心が強くなって、統計方法の問題として、工業構造の統計とはかなり違った問題が出てきているように思うんです。この先生のご本には、その問題がある意味ではみんな出ているように思いますが、その辺何かお考えがございませんですか。工場統計というか、工業構造の統計と、工業生産の統計との区別、あるいは関連というような面で。

米沢　私は、『工業経済統計』では、生産動態統計の考察にまでは、あまり届かなかったように思います。やっぱりいまおっしゃったような、工業構造に主眼があるだけで終わったように思いますけれども、しかし、確かに統計としては、生産動態統計も非常に大事だし、それがむしろよく利用されていると思う。統計資料としても、少し後になってからだけれども、生産動態統計が非常に力を入れられたわけですね。戦後はことにそうだったと思

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いますが、やはり場合によっては、両方組み合わせてみるとか、両面から考察するとかいうことが大事なのではないでしょうか。

広田　生産指数などでも、結局、付加価値ウエートということに現在なっておりますし、ならざるを得ないわけですが、そうすると、付加価値をどこでとらえるかというと、事業所別にとらえて、それを品目別に大ざっぱに分けるよりほかない。品目別の原材料と出荷額の把握は、なかなか困難ですから。付加価値や従業員数は事業所でとらえる、他方、指数の方は品目別にならざるを得ない、そこのところに、構造統計と生産統計との非常にむずかしい絡み合いのようなものがあると思うんです。

この問題は、いってみれば経済統計の一番基礎的な問題なのに、どうしてそういうことをもう少したくさんの人がやってくれないのか。そこを飛び越してしまって、国民所得統計だの、産業連関表だのの方へいってしまうその推計の基礎になっているのは工業統計だし、生産動態統計なんだけれども。これは、自分自身の反省を含めていっているんです。私も、最初、国民所得ばかりやっていたけれども、このごろ少し工業統計の問題に打ち込んでみようかと思っているんです。

三潴　基礎統計の中のまた基礎統計ですものね。

広田　経済分析という観点からいったって、やっぱり製造業が何といっても基礎ですからね。

米沢　それから、その構造統計の方でも、事業所単位で集計するか、企業単位で集計するか、その問題もようやく近ごろ注意されてきて、現に工業統計表にも企業編というのが出るようになったんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　いま三潴さんのいわれた分類の問題についても、事業所が適用単位になって産業分類ができているけれども、企業を集計単位にする場合には、いま小分類ぐらいまで上げてやっているんでしたか、しかし、それでいいのかどうか。本来、企業の分類と事業所の分類とは、やはり方法的には別のものじゃなかろうかと思うんです。そういうふうに、研究しなければいけないことはずいぶんあるように思うんです。

三潴　分類表と分類標識、何をとるかということじゃないの。企業の場合にはこれ、事業所の場合にはこれ。しかし、現実には共通の分類標識が……。

広田　共通の産業分類でやっているでしょう。産業分類というのは、元来は事業所に適用する。それを準用しているわけですね。

三潴　そのときに、主たる産業で押さえるでしょう、企業でも事業所でもそうですが。いまのように化学工業が多角的な生産物をつくるときは、ほとんど意味のない分類なんですね。

米沢　だから、品目別がもう1つ必要なわけですね。

三潴　その分類の話なんですけれども、先生のいろんな統計学の本の方でも書いておられるんですが、グループ分けというのと分類（classification）というのと、先生のお考えでは、はっきりお分けになりますか。それとも、グループ分けを、量的標識による分類と質的標識による分類の2つに分けて、すべてを含めていうのか、その辺はどうですか。

米沢　グループ分けという言葉は、例のエヌ・グラチョ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

フというソ連の学者が使っているのを、これはいいなと思って借りてきたようなことで、あの考え方そのものは取り入れていいのではないかと、いまでも思っております。

三潴　度数分布という言葉を使いますけれども、量的標識によるときにだけ度数分布という言葉を使って、質的な場合には使わずに、構造統計表といいますでしょう。そういう分け方自身に対して、先生が積極的な疑問を投げかけていらっしゃるんじゃないかなというように私は感じたんです。つまり、量的分類というのは、質的分類の一種の現象形態みたいなものだということをどこかで拝見したんです。

そういうふうに考えれば、グループ分けというのは、上位概念みたいなもので、2次的な概念の中に量、質とある。しかし、質的なものだって、考え方によっては、農業人口が何人という度数ですから、両方に度数分布という言葉を使っても、構わないんじゃないかと思うことがあるんですが、伝統的には、度数分布というのは量的な分類にだけ使っている。

米沢　まあ、そうでしょうね。

三潴　事実、先生が、『工業経済統計』などで最初に取り上げられたのは、質的なものも量的なものも両方ですね。だから、1945年では、まだグループ分けという言葉がないわけですけれども、分類という言葉で、実はグループ分けをなさっているところもあって、それは先生のご本では、統一的に論ぜられているんじゃないかと思うんです。

広田　言葉の問題ですが、おそらくソ連の文献は、ドイ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ツ社会統計学派のGruppenbildungから来たのではないかと思います。統計学の伝統としては、ソ連自身は浅いわけで、結局ドイツの影響かなと思うんです。分類というのはclassificationで、どちらかといえば西欧の概念ですね。分類とかグループ分けといまいわれているけれども、たとえば日銀の卸売物価指数などは、類別指数といいますね。そういうものは関連を考えないで、わりといろいろに使われていますね。

三潴　ちょっと混乱があるといいますかな。

広田　これは、用語上の混乱にすぎないけれども。

三潴　産業、職業分類については、先生は、社会的分業というものを基礎に置いて説明をなさっていますが、官庁統計の分類にはそれが全然なくて、とにかく事業所を対象にした産業分類、人間を対象にした職業分類、職業人口と産業人口はイコールでなければいけないという非常な形式主義でやっています。

先生がこれに書いておられるのは、社会的分業をあらわす産業構成、あるいは有用労働の差別による事業所内の職業構成などから、先生がどういう経済学の目で経済統計学を書いておられるのかがよくわかるのです。これは、新SNAの方法と全く違うんじゃないか。

それに、中小企業とか中小工業の問題ですね。あれは有沢先生がやられて、小宮山琢二氏なんかがやりましたが、ああいう製造業の中での中小企業の位置づけとか、中小企業労働者の置かれている地位とかいう視点よりは、むしろ工業構造の中での中小規模工業という方向で、先生はとらえていらっしゃる。具体的に宮城県の場合に、

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

中小工業、地場産業などという言葉も出てきますけれども、地域経済の実態調査も東北大時代になさったんでしょうか。

米沢　それについては、いろいろお話ししなければならないかと思いますが、最初にいわれた小宮山さんの本などは、ずいぶん読んだ記憶があります。

三潴　先生、工業経済の講義なさっていましたね。

米沢　いや、君の学生のころはしていません。昭和19年に始めて、たしか学徒動員のために1～2時間でおしまいになって、戦後改めて学科目に取り入れられたのでやった。戦争中も、もともとああいうものは、経済政策でやればいいということになっていたけれども、生産力拡充とかいうことで多少刺激をされて、工業経済学も独立してやったらいいだろうということなんです。むしろ私が買って出たような形で始めかけたんだけれども、それはそれで終わってしまって、戦後、世の中は変わったけれども、やはり工業経済学は必要だろうというので、また始めたわけです。

ですから、小宮山さんの文献ももちろん参照しましたけれども、さっきおっしゃった実地調査は、1942年の5月、「東北地方の機械器具工業の新展開」という、その当時あった東北産業科学研究所というところから出た雑誌に出しました。これは、委託調査だったんです。東北産業科学研究所という、いまの東北開発会社の前身の東北興業という会社の研究部門だったわけです。東北地方の開発に関係のある研究に補助金を出したりしたので、長谷田先生の口ききだったと思うんですが、ひと役買ってちょうど軍需生産の促進ということが問題だったので、

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

そのころ機械器具工業といっていたその業種にしぼって、実地に調べてみようということになったわけです。これは、統計とは直接には関係ないわけですけれども、やっぱり実際に見て回ることが必要だということを、そのプロセスにおいて痛感したわけです。

ただ、その場合に、ノ軒ノ軒調べてみて、いわゆる個別的な情報をそのままでおいてはいけないわけで、それを集団的な情報に高める必要があるわけですけれども、そこで社会統計の方面では、個別的な情報がもとになって集団情報が出てくるという、その段階が非常にむずかしいというか、両面があるということを痛感して、個別的な情報をつかまえる段階で、相当の配慮が必要だということを身をもって感じました。

それで、さっきちょっと申し上げた工業経済研究会の設立。

三潴　あれはやっぱり戦後ですか。

米沢　それは戦後なんですが、その前に、いまいった委託調査を受けていたし、それは戦争中だったので、生産力拡充に幾らかでも役立つようなことが望まれたわけです。

ところで、『工研三十五年史』というのが最近出たんです。その工研というのをつくったのも、ただ大所高所から理論的に見ていただけでは十分でない。ノ軒ノ軒、中小工場を見て回らなければいかぬということを痛感したもので、それを学生にも少しやらせたいということで、ちょうどゼミの学生がそういうことを望んだので、見学に行ったこともあるし、調査に行ったこともあります。そういう活動をずっと続けてきたわけです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

だからその面では、統計をまとめるというよりも、むしろ統計に反するような一つ一つのものを、とにかくつかんで知るということの方が先行する面がある。その辺が、実際の社会経済統計の、自然現象などを見る場合との大きな違いじゃないかということを、私いまでも痛感しているんです。

三潴　工業経済研究会、工研ができたのは、22～23年ですか。

米沢　22年ぐらいだったと思います。それで、ちょうど35周年になるので、『三十五年史』というのをつくったのです。

三潴　イールズ事件の後ですか。

米沢　いや、昭和22年です。戦争直後ですから。

広田　それは、どういうメンバーでつくられたのですか研究者ばかりですか。

米沢　いや、ゼミの学生です。初めは、私のゼミと一体だったんです。

広田　学生の研究団体ですか。

米沢　そうです。

広田　これは、いまも続いているんですか。

米沢　ええ、いまも。金田さんの指導のもとで。

三潴　金田さんって、工業経済が専門で来た人ですね。

広田　なるほど、珍しいですね、研究者の団体というのはあるけれども、学生の研究団体というのは。そうすると、中心的な役割りを演じた学生のOBなんかがこういうふうに編集したわけですね。

米沢　いや、現役ですね。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三瀦　OBの同窓会みたいなものがあるわけですね。

米沢　ええ、そうなんです。それがつまり、ゼミのOB会と工研のOB会の両方が合わさって、よく寄り集ってくれるわけです。

広田　これは珍しい。『工研だより』なんというのを出している。

　これは、米沢先生の東北大学の研究教育上、特筆すべきことだと思いますが、東北大学の座談会なんかには出てこないですね。

三瀦　実際は、調査票などを設計して、それを事業所にぶつけるんですか。

米沢　ええ、そうです。幸い山形県がずっと長い間助成金をくれたもので、その関係で、毎年業種を違えて、山形県下を調べたわけです。それで今日まで続いていたのですが、この間金田君に会ったら、今度補助金が打ち切られるという話をしていました。

広田　臨調の関係ですね。

三瀦　山形県の産業というと、地場産業のようなものが対象になるわけですか。

米沢　当然そういうものも入ってきますし、業種によって全然違うことがあります。

三瀦　そういうもののレポートのようなものは、山形県の報告書という形になるわけですね。

米沢　そうです。印刷されたものもあるにはあるんです。

三瀦　最初におっしゃった長谷田先生、諸井貫一さん、それで先生がタッチなさった報告書の延長が、やっぱり先生の関心の中にあるわけでしょうね。

米沢　それは地方工業化委員会の仕事で、それから東北

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

産業科学研究所の方の委託調査、両方とも戦前ですけれども、時期的にも少し違うんです。しかし、つながりがあるといえばあります。もっとも、前の方のはほとんど机の上の仕事だけで、統計解析の仕事が主だったわけです。後の方のはそうじゃなくて、いわゆる統計実査というものに関係があったわけです。そんなことを通じて、こっちもだんだん覚えてきたわけです。

三潴　戦前、日本の中小企業問題というのは、いろいろな人が相当やり出すようになってきたけれども、先生の場合には、中小企業の問題というよりは、中小規模工業の実態分析という方に重点があった。

米沢　まあ、そういうふうに考えてくださっていいと思います。

三潴　また、法政大の清成氏だとか、専修大の中村秀一郎だとか、最適規模論の末松玄六さんがいますね。またこのごろの地域主義研究と結びついたりしてやっているさっき雑談に出ましたように、玉野井さんなどもそっちの方の研究ですね。

先生の場合はそれとは非常に違って、もっと工業実態の構造分析というところで、きちんと整っておられる。

それから、さっきちょっといいかけたことですけれども、そういう工業分析をなさる場合に、賃金だとか、労働生産性だとか、いろいろ格差の問題がありますね。そういうときに、いわゆる標準化計算をなさるわけですけれども、先生は標準化計算を相当幅広く拡大適用といいますか、そういうことを非常に強調なさっておられる。そして標準化計算の場合には、平均を出すために標準化

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

をしなければ、2つの異なる集団の比較はできないということでしょう。そのときに、部分集団同士の比較と、標準化計算をして出した総平均の比較と、関係はあるけれども、ちょっと違う側面を見るような気がするんです。標準化計算を強調なさる場合には、総平均の比較をより合理的にするためには、標準化計算をしなければいけないというお考えでしょう。標準化計算をどこまでもやった方がいいか、その点を教えていただきたいんです。

広田　別の言葉でいうと、標準化計算とは、1つの要因だけを孤立化して比較することによって、その要因の影響を純粋な形で見ようという、死亡率の比較などから出てきた手法だと思うんです。ただ経済現象の場合は、現実には1つの要因は、ほかの要因と必ず結びついているわけですね。たとえば、2つの産業部門の平均賃金を比較するとき、年齢構成が非常に違う。その場合に、年齢構成を標準化して比較をするというのも1つの分析ではあるけれども、同時に、ある産業部門では、年の若い労働力を主として集めている。他の産業部門では、年齢構成が中年に偏っている。そして、それぞれの産業部門では、そうならざるを得ない事情があるという場合に、標準化しない総平均、若い者を集めているから平均賃金が安い、それも1つの重要な事実の分析なのではないか。

米沢　いや、それです。まさに両方必要です。標準化しない計算というのも必要だということはあると思いますが、ちょっと意味が違うようですね。どちらかというと、やっぱり本来、標準化して比較すべきものではないかというのが、私の考え方なんです。

ただ、死亡率などの場合だと、年齢だけで標準化する

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

わけだけれども、いまの賃金の比較のような場合は、年齢も勤続年数のようなものも全部標準化するから、2重3重の標準化計算というのが本来必要です。しかし、実際はそういうことはできないから、一番目立つことだけで標準化せざるを得ないという側面もあるわけですね。

三潴　どれが一番目立つかを探し出すことまで論じておられる。

広田　統計比較の問題を一般的に、理論的に展開する場合の、1つの中心的な問題点になるのではないかと思いますが……。指数の問題なんかもそうですね。

米沢　物価指数のラスパイレス式だとか、パーシェ式はまさに標準化計算ですね。

三潴　そういう説明は、体系的には、人口から始まって賃金でも物価指数でも、全部ウエートを統一して比較するから標準化だという説は、わかりやすいんですけれども、もう1つ、さっき先生がいわれたのは、標準化すると真の比較ができるとよくお書きになっている。あれは「できたら」という意味ですか。そうすると、標準化しない前のは、にせの比較、といったらおかしいですけれども、標準化しなければ比較すべきでないというふうにいい切れるのでしょうか。

米沢　そこはさっき広田さんも指摘されたわけで、なまの比較は、それはそれで意味を持つ場合もあるわけだし

三潴　しかし、そういうことをいい出したら、こういう暴論につながるかなと思うんです。

たとえば、ラスパイレスで分子、分母にQ_0を掛けますね。しかし、もし、分子を$\Sigma P_1 \cdot Q_1$のままで$\Sigma P_1 \cdot Q_1 / \Sigma P_0 \cdot Q_0$で比較したら、そういう比較も意味があること

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

もあると思うんです。

たとえば先月の家計支出で、家族構成は夫婦と子供1人で、今月も全く同じだとし、消費の内容は、先月も今月もあまり変わらないとします。しかし、少しは変わるから、ウエートはそれぞれQ_0とQ_1となるわけでしょう。この場合、支出金額が先月は3万円で生活できたけれども、今月は3万3000円になったというような比較をやることがありますね。しかし、それではいけないので、やはり標準化計算をして、分子分母のウエートを統一して比較しなければいけないのかどうか。そこのところは、どういうふうに考えたらいいんでしょうね。

広田　分析という以上、ある1つの要因を孤立させるという操作を行なうのは当然である。それはやはり研究の内容を豊富にする1つの分析だと思いますね。ただ、そういう分析で、グロースの比較の中に含まれている内容が尽くされているのかというと、そうではないわけですね。比率にすることによって、もとの絶対数を忘れてはいけないということがよくいわれますけれども、何かそれに似たようなことがあるように思うんです。

米沢　確かにそうですね、そのとおり。なまの比較というか、もとの比較が意味を持っている場合もあると思うので、その場合には、やはりそういうものを役立てなければいかぬと思います。

広田　標準化について、いろいろな分野で方法的には同じ問題があるということをいわれたのは、米沢先生が初めてでしょうか。

三潴　そうじゃないかと思いますね。従来は、物価指数なら物価指数だけで論ずる、人口統計の標準化は、人口

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

統計だけで論ずるという単発式ですよ。

広田　フラスケンパーの指数論には、統計比較の場合の条件を共通にするというような観点があるんじゃないですか。

米沢　ええ、あったと思いますが、特にそれに載っていたという記憶もないので、やっぱり死亡率の標準化などに非常に興味を覚えて、いろいろ考えてみると、これだけではなくて、もっと広く、特に賃金の比較などの場合に考えられるんではないか。だから、むしろ平均の比較の場合にも当てはまるのではないかということは、自分なりに自分で考えたように思います。

三潴　標準化するというのは、ウエートを統一するということなのだから、総平均を問題にするときに、どうしても浮上してくると思うんです。

そうすると、さっき広田さんが出した例で、先生も、賃金比較のことで、有沢先生の還暦記念の論文集で書いておられるんですけれども、造船業と繊維業の賃金比較でしたか、それをやった場合に、造船業資本の人件費総額と、繊維産業資本の人件費総額とどちらが大きいか。これは1人当たりとしての問題ですね。そういう比較はそれなりに意味がある。

しかし、標準化して、両方とも標準人口構成で比較をすると、たしか先生の例では逆転しますね。逆転したのが真の比較だとおっしゃると、ぼくはそうかなと思ってしまうのです。(笑)

これは先生の受け売りなんですが、トータルというのは、Σxを問題にすることですが、それは同時に$\bar{x}$を問題にする意識と全く同根ですね。標準化というのは、簡

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

単にいえば、xの相互比較でしょう。A集団とB集団の賃金支払い総額Σxを比較するという発想と全然同じだから、その場合に標準化することの意味と、しない場合の意味と、両方あるということですね。

広田　どちらも観点によっては「真の比較」になるんじゃないでしょうか。たとえば、ある地域と他の地域の死亡率が違う。A地域はB地域に比べて死亡率が高い。しかし、年齢構成を標準化してみると逆転して、A地域の方が低くなった。それは、地域が健康状態に及ぼす影響とかいうようなことを分析するためには、それが真の比較になりましょうね。しかし、たとえばA地域は、年齢構成が高いがゆえに死亡率が高いということは、その地域の人口の増減とか、その他の社会、経済的観点からは、それだけで重要な指標になるわけですね。

米沢　そうですね。たとえば医療施設などは、そういう方面で多くしなければいけないわけだから、やっぱり目的によりますね。

三潴　保険会社としては、老人がたくさんいるところを対象にしたら損をしてしまうから、なかなか死なない若い者の集まっている都市の方が得でしょう。

広田　保険料金の率を考える場合はね。

三潴　保険会社としましては、どういうところをマーケットにしたら得かという戦略を考える場合に、死亡率の高いところをマーケットにしたら損だということになりますね。そのかわり、たくさん保険料を取ればいいということはあるかもしれませんが。標準化の問題は、確かに人口統計は非常にスカッとわかる。しかし、標準化してみても、もとのままだというケースだってありますね。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

先生、どこかでそういうことを書いていらっしゃいましたね。

広田　実際には、むしろその方が多いわけですね。順序も変わらない。

三潴　ただ、それが逆転しないまでも、ちょっと縮まるということはあります。標準化計算というのは、そういう意味ではおもしろいというと、ちょっと生意気だけれども、統一的な把握が重要だ。けれども、さて、片っ方も捨てられないという、先生一流の踏みとどまるということになる。

広田　やっぱりある限度内での分析ということで、ちょうど物価指数でウエートを定期的に変えざるを得ないということと似た事情があるようですね。

米沢　確かにそうですね。

三潴　同じようなことを、ランダムサンプリングとセンサスということで、いってみれば両極端のことですが、統計局が層別をやりますね。層別ということは、ランダムと全く相反する発想で、そして最後に乱数表を引くわけでしょう。だから、伊藤陽一君だったか、統計局のやり方は、自己矛盾だというんです。いきなり乱数表引かないで、層別して標本を引いた方が、効率のいい縮図ができる。層別とランダムとは相反する、ちょっときつい批判ですけれども、具体的に統計局でやる場合でも、ランダム一本やりでは現実にはできないということです。

先生もご承知のように、家計調査などでも、白羽の矢が立った人が引き受けてくれるケースはまれでしょう。そういうことになると、ランダム性というのは崩れていく。それで、統計局は家計調査で頭を悩ましているらし

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

くて、家計調査の対象が比較的余裕のある家庭にシフトするとか、一種の典型調査に事実上なっているんじゃないか。そういう理論上の問題と、統計の実査の問題というのがだんだん乖離していって、それには目をつぶらないと、仕事にならないらしいんですね。だから統計局は、拒否率などというのは一切発表しないでしょう。ただ、誤差率何%なんてことが、報告書の後ろに書いてあります。

ところで、ランダムサンプリングとセンサスというのは、視点を変えれば、それぞれの意味があるのでしょうけれども、ちょっと局面が違いますが、標準化と標準化しない問題というのは、どちらか片方だけではダメだという感じがします。

広田　工業統計に関連して、労働生産性についてのご研究が、数の上からかなり多いように思うんですけれども、これは工業生産の統計の研究ということから当然出てくることですが、同時に、昭和30年ごろできた生産性本部で、労働生産性統計をつくり始めたということと関連があったわけですか。

米沢　生産性の測定の研究発表は昭和24年ですから、生産性本部よりはむしろ前で、別にそういうことで刺激されたわけではなく、『資本論』にもプロドゥクティビテートということは出てきますし、前々からそういうものに関心を持っていたと思うので、工業統計みたいなものをやるからには、それが1つの大きな研究題目だということで始まったと解釈してくださっていいと思います。

広田　先ほどちょっと申し上げたことと関連するんですけれども、一方の労働量、他方の生産量、両者が範囲の

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

点で対応しないという、なかなかむずかしい方法上の問題がありますね。労働者数というのは、どうしても事業所別にならざるを得ない。生産指数となると、どうしてもこれは品目別になってくる。そうすると、両方は本当にはかみ合わないわけで……。

米沢　そういった問題も確かにあったと思いますし、標準化計算の導入ということも入ってきます。

三潴　1965年3月に、先生の『地域集計の整合と標準化アプローチ』という論文がありますが、こういう場合の標準化というのは、どういうことを使われたのですか。

米沢　やっぱり標準化計算の導入だったと思いますがね

三潴　それから、ちょっと話題が違うんですが、先生は大内武次とか、杉栄とか、糸井靖之という昔の統計学者のことを、経統研の機関誌『統計学』で取り上げておられる。先生はかつて4～5人取り上げていらっしゃいますね。これは、先生の方から、今度はこれを書こうということをおっしゃったのだと思いますけれども、それはどういうお考えだったんですか。

米沢　よく覚えていないのですけれども、場合によっては、あまり人に知られていない人を後世に伝えておきたいという気持ちだと思います。糸井さんや益田熊雄さんは別だけれども、大内さんとか杉さんは、学会などでお会いして、直接相対したことを伝えておいた方がいいと思ったのだと思います。

広田　「地域分析」という題のついた論文がかなりあるわけですが、それはやはり仙台にいらして、工業統計の県別の分析をやられたというところに源を持っているわ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

けですか。

米沢　そうだと思います。それで、たまたま日本地域学会というのがあって、その創立のときは、ちょっと知らなかったのですが、後で入会しました。

三浦　日本地域学会ですか。

米沢　そうです。

広田　そうすると、経済学以外の分野の人も入っているわけですか。

米沢　入っています。この方面の一番の親玉は、アイサードというアメリカの学者だったのですが、世界学会の日本支部のようなものが日本地域学会として成立しました。

三浦　国際的な略語は、何といいましたか。

米沢　RSA（Regional Science Association）です。

三浦　本部はアメリカですか。

米沢　そうです。

三浦　これは、どのくらい歴史があるんですか。

米沢　戦前からあったと思いますが。

三浦　インターナショナルという名はついていないんですね。

米沢　それがインターナショナルの学会で、その日本支部が日本地域学会なわけです。ほかの国でも、おそらくそういう関係だと思います。

三浦　日本の場合は、どういうメンバーですか。

米沢　経済学関係や、土木工学のような都市計画の関係の方々もかなり入っています。

三浦　玉野井さんのような発想の方もいらっしゃるので

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すか。

米沢　それは、私はあまり知りません。

広田　社会学者などは……？

米沢　地域開発の関係の方々です。

広田　そうすると、理科系の人がかなりいるわけですね

米沢　ええ、都市工学とか、地理学者はいます。そういう会があることを知ったので、むしろこちらから望んで入会したわけです。

三潴　RSAにも参加なさったのですか。

米沢　私の記憶では、RSAのヨーロッパ会議というのが、ポーランドのクラカウであったときに参加しました

三潴　ワルシャワのISIとは別ですね。

米沢　それより大分前だったと思います。

広田　ところで、経済量の不平等度の測定ということについてですが、これは古くからの経済統計独特の解析方法の1つだと思います。先生は、数理的な側面から、その丹念な研究をやっておられるわけですが、やはり課題は、経済分析の必要から出てきて、それを今度は、統計方法として仕上げるということで、いかにも米沢先生らしいお仕事だと思うんですけれども、そのことで何かお考えになっていることはございますか。

米沢　あまり話が大きくて……。ぼくはどこかで筆のすさびに書いてあるけれども、統計学は平均の科学だといわれるけれども、むしろ分散の科学だといった方がいいという気持ちは確かにあったと思うし、いまもあります

広田　不平等度という形でのばらつきのはかり方は、通常の統計学には出てこない問題じゃないかと思います。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　問題は、ばらつきというのは、せいぜい標準偏差ぐらいの……。

広田　それを変異係数という形にするとか。しかし、それは所得分布ということではないわけなんだね、経済的に問題にする場合には。

三潴　この間、統数研の田口君が報告したでしょう。あれもやっぱりローレンツ曲線の……

広田　ジニーの係数だとかね。あれは問題は、明らかに経済量のばらつきをはかる場合、経済学的な意味づけができるようにという観点があるのだろうと思うんです。ですから、純粋に数学の問題にしてしまうのではなくて。

米沢　私は、そこまでいってないと思うけれど、やはりそういうことを志してはいたと思います。

広田　あれは私、講義でいつもやらせていただくんです。そうすると、わかりがいいんです。数式での記述と、それの実質的な意味を学生にわからせるのに。図示法としてのローレンツ曲線というのは、非常に巧みな手法だと思います。

三潴　ただ、ローレンツ曲線は、相互に入り組んでくると、相互比較はむずかしいでしょう。あれは、結局面積計算だから。

米沢　その点は、いわゆるローレンツ図形の面積が同じでも意味が違う場合があるということで、最近は特に注目され、指摘されているようですけれども、ローレンツ曲線そのものは、長い間本当にすたれないですね。最近、西ドイツの"Wirtschaft und Statistik"という経済雑誌にも出ていますね。毎号でもないかもしれないけれども。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　戦時中、昭和18年くらいでしたか、日本統計学会で、『国民所得とその分布』という本を出したことがありますね。その中に、田村市郎さんの、この問題についての長文のサーベイみたいなものがございましたね。

米沢　あれは十分参照しました。

広田　どうして日本統計学会でああいうことを特集したんでしょうか。

米沢　何かの研究費をもらったためだと、私は記憶しています。

広田　特にその時代との関係は、あまりないわけですかあれはむしろマクロよりも、そういう分布の方に力点があるんですが、18年よりもっと前でしたかね。

米沢　いや、発刊されたのは、18年か19年だったと思いますが、実際研究されたのは、その2年くらい前だったと思います。実際にグラフなどを使ったのは田村さんで宗藤圭三さんも書いておられましたね。

三潴　相関分析ですが、数理統計のものを見ると、とにかく無味乾燥でつまらないんだけれども、先生のものは象限で説明して、ぼくらみたいに数学が弱い者にも非常にわかりやすいんです。

相関と回帰というのは、大変興味があるけれども、ひょっとしたら、形式に引っ張られる危険がありますね。もっとも、統計は何でもそうだといえばそうなんですが相関回帰なども、先生がお書きになる場合に、わりあい力を入れてお書きになっているところではないんでしょうか。

米沢　ええ、そうだと思います。やはり相関係数という

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ものには、統計学の勉強を始めたときから非常に関心を持っていましたし、ほかの平均だとかいうものは、常識でもずいぶん扱われているけれども、相関係数となると、やっぱり統計学をやらないと意味がわからない、あるいは統計学プロパーの領域に入らないとダメという感じを持ったわけですから、かなりそれには力を入れたという面もあります。結局、なかなかつかめなかったわけですけれども。

三潴　いま数理統計の人でも、たとえば光藤昇君とか、回帰分析を非常に一生懸命やりますね。

広田　多元回帰とかね。

三潴　また話がちょっと行きつ戻りつしますが、分類でも、統計数理研究所の坂元慶行君が、カテゴリカル・アナリシスをやっていますが、あれはやはり質的なクロス分析ですね。ああいうふうに非常に数理的なことをやる人も、結局、質的な問題を量に還元してしまうんだけれども、取り上げているんですね。

広田　それは、質的に分類されたデータを解析できなければ、経済統計、社会統計をやる場合に、統計解析の効用が非常に小さくなるから、ああいうところへ来るわけでしょうね。

三潴　コリレーションじゃなくて、アソシエーションなんですね。

米沢　「関連」と訳しているんですね。

三潴　回帰分析でも、たとえば所得倍増計画なんかのときには、一種の回帰線を引くような考えじゃないのですか。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

広田　回帰分析を時系列に適用する場合と、ある構造を示すクロスセクション・データに適用してある関係を分析する場合と、方法的には区別しなければいけないように思います。時系列の場合には、かなり問題がある。その前に、データ自身をどういうふうにデフレートしておかなければならないかというような問題が、たくさん出てきますから。これはエコノメトリックスに通じてくるわけで、こちらの方はかなり問題があります。たとえば賃金構造基本統計調査などの年齢と平均賃金とか、いろいろな分析には回帰分析が適用できます。もちろんこれは暫定的な一応の分析で、それが安定している関係だとはいえないけれども、ある程度安定している関係を出すことはできるように思います。

三潴　やっぱりどれとどれとで相関を組むか、回帰を組むかということが決め手でしょう。あとの計算は、やればいいわけですから。

広田　それは形式的なことになりますからね。ファクターがふえるとか、あるいは回帰を、直線じゃなくて2次曲線にするとかいうことで、飛躍的に計算量がふえるわけでしょう。われわれ個人が分析をやる場合には、そちらの方に仕殺されてしまって、その経済的意味というような方は、どうしてもなおざりになりがちになる。だからぼくは、比較的単純な、個人でも何とかやれる程度の計算量でこなせるような分析が、実際には非常に有用だと思います。賃金構造基本統計調査の年齢と賃金になると、少なくともう2次曲線でないとダメなんですね。

三潴　労働能率と工場内の室温の関係の例がよく出されますが、うんと寒ければ労働能率が落ちる、どんどん温

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

度を上げていくと能率は上がるが、さらに熱くなれば、また能率は逆に下がってしまう。これが2次曲線ですね。そういうことは、ある意味では常識でもわかりきったことで、あまり大上段に2次曲線など振りかざす必要もない。

広田　大変な労働をして、ごく常識的な結果しか出ない。

三潴　講義などで学生が喜ぶのは、回帰線を引くときに、夫と妻の年齢の関係を例示する。別にどうということはないんですけれども、年取った夫には年取った女房がいるというだけの話で。(笑) それを統計的にやれば、厳かにできるわけです。あまりつまらないといって講義すると、学生は本当にしてしまう。

広田　本当につまらないと思ってしまうと困るんでね。

三潴　統計批判のときに、先生のように、地道にやって批判するならいいけれども、すぐ大所高所に立ってね。つまらない統計だといって、講義をやめてしまう人もいないけれども、極端にいえばそういう姿勢になる危険はありますね。

広田　年齢と賃金に2次曲線を当てはめますと、女は30前後がピークで、あとは下がってくる。それから、30後半から40の前半くらいに、2次曲線の回帰線に合わない、ポコッと下がるところができるんです。これは、パートタイマー的従業者の影響だろうと思う。特別低くなるんですね。だから、2次曲線を引いて、フィットしない部分が出れば、なぜだろうという、その次の問題が出てくるから、無意味ではない。

三潴　ファクト・ファインディングでしょう。確かに、やってみて気がつくということはありますね。やってみ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

て無意味の場合もあるし。

広田　これは、2次曲線当てはめの好適な例なんです。大企業の男子労働者は、かなりぴったり当てはまりますよ。ところが、女子労働者や中小企業になるとまずい。2次曲線が当てはまらない。

三潴　さっきもちょっとおっしゃいましたが、日本統計学会が昭和6年にできて、森田先生の『統計遍歴私記』にも、ISIを日本でやったときのきっかけとか、詳しく書いてありますが、米沢先生はどういうきっかけで、日本統計学会にお入りになったのですか。

米沢　昭和10年に有沢先生のところへ行ったわけですがその後くらいに、もう統計学会へ入れといわれて、結局昭和11年くらいに入会したかと思います。

三潴　それでは、助手のころですね。

米沢　ええ。

三潴　そのころ、日本統計学会というのは、何人くらいだったんですか。

米沢　昭和6年に170名。

三潴　和田佐一郎さんも入っているんですね。

米沢　あのころは、そういう方が多かったですね。

広田　経済学者の脇村義太郎さんとか、藤田敬三さんなど、統計とは直接関係のない人が入っている。那須浩、これは農学者でしょう。

三潴　このころ経済学会というのはなかったんですかね

広田　田中金司という方は、神戸大学の金融論の人でしょう。

三潴　須永さんもいらっしゃる。

米沢　須永さんは、私とほとんど一緒に入ったんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　それで、統計学会は50周年になったんですが、統計学会については、量的拡大と質的変化ということはお感じになりますか。

米沢　それは痛切に感じますね。入会したときの会員は170名でしたからね。

三潴　これは総会の写真。

広田　研究総会に出てきた人。

米沢　ぼくは、この前の年にも参加していると思うんです。第6回のときの写真にも写っています。

広田　山田勇氏なんかもいたんだね。名古屋高商で……。

米沢　内閣統計局で催されたんです。そのときから出席しました。

広田　数学出身者が、会員の中にかなりおりますか。

米沢　いや、最初のころはそんなにいないんです。

森田さんの本にも書いてあったけれども、数学関係の方は少なくて、むしろ物理学者の寺田寅彦さんとかが入っていたんです。参加したのが30人ぐらいで、このうち何か報告する人が半分以上はありましたので、報告しないと肩身が狭いように感じて、有沢さんにもよくいわれたものですから、結局1939年4月に国民貯蓄を初めてやりました。その2年くらい前から会員ではあったのですが。

広田　当時も、「景気指標」なんかで共同研究がありますね。

三潴　それで、日本統計学会の量的、質的の問題ですけれども、量の方は目で見ればわかりますが、質的には50年間の学会の内容をどういうふうにごらんになりますか。

米沢　最初は、やはり当時のそうそうたる方々が発表し

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ていました。私だけを除いて、いずれもかなり年長の方々でしたよ。

三潴　この中で、先生なんかお若い方ですか。

米沢　ええ。小出保治さんと私ぐらいがかけ出しで、あとは相当の大家でしたね。ですから、この当時から、質的には相当高かったんじゃないかと思います。

三潴　保険統計の人などは、あまりいなかったですか。

米沢　アクチュアリーの人もいましたね。亀田豊治朗さんという非常に古い簡易保険局の役人で、後に保険会社にも関係していましたが、あの方の報告もありました。

三潴　それから、もちろん統計局の方はいるわけだけれども、自治体の統計家というのは、あまり参加はなかったんですか。いまでも、あんまりあるとはいえないけれども。

米沢　そういう人は、日本統計協会などの別の団体に入っている人がありますね。日本統計学会には、たとえば北海道の内館泰三さんなど、探し出せば何人かはいたと思います。学界以外の人を、最初から拒まずに、むしろそういう人も入れようという気風ではあったと思いますが、いざ入るとなると、なかなか実現しなかった。

三潴　小島勝治さんなどは、その時点でご存じでいらっしゃいましたか。

米沢　よく知らなかったですね。日本統計学会年報によると、小島さんは昭和15年4月入会で、その後名簿には載っています。私の覚えているのでは、直接会ったことはなかったと思いますが、大阪市役所の松野さんという人から手紙をもらって、『浪華の鏡』に寄稿を促されました。一番最初には書くことがなかったもので、諸井さん

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

の手伝いをした結果を発表したんです。そんな関係で、たまには『浪華の鏡』に寄稿はしていたのですが、小島さんと直接交渉を持ったことはないように思います。

広田　主として大学などにいる研究者としての統計家と、統計実務をやっている官庁統計との関係ということなんですが、ヨーロッパなとでも、ケトレーはもちろんのこと、あの時代、研究者としての統計家の集団的な研究がかなり官庁統計を指導するという側面が初期にあったと思うんですが、日本統計学会ができて、この点はいかがでしたか。やはり最初は、指導的な位置を占めていたわけでしょうか。

米沢　内閣統計局が会場になって、日本統計学会をやったことがありますから、そういう意味では非常に協力的でした。そのころの統計局では、長谷川さんや友安さんが有力な会員だった。

三潴　水谷さんとか、森数樹さんは……。

米沢　統計局の水谷良一さんは、統計局から外へ転任したとき、脱会されました。森数樹さんは、ずっと会員でした。そのような官民一体的なことはありました。内閣統計局の人がかなりいましたから。

三潴　中川友長さんとかね。

米沢　いまよりそういう交渉があって、お互いに影響した点はあると思いますが、特に統計学会の会員が指導したということはないのではないですか。

広田　そういうことをお聞きしたのは、現在、日本統計学会も経済統計研究会も、いまの統計調査、官庁のやっている分析の実態に対して、これを支持する、あるいは批判するということは別にして、かなり距離があって、

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それぞれ勝手なことをやっているというような感じがする。統計学というのは、理論的であると同時に、実際を離れては成り立たない学問だろうと思うんです。それがうんと離れてしまった。

したがって、研究者の方がやることというと、かなり細分化されて、特に数理統計の人は、本当に細分化されたことをやっている。わが経済統計研究会の方も、果たして実際に即した研究をやっているかどうかということを考えるものですから。

三潴　日本統計学会のことをここで直接伺う立場にはないのですけれども、質的変化について、先生はどのように感じていらっしゃいますか。量は1000人以上と多くなりましたが、つまり、プラスとマイナスということでしょうか。視野が広がって、研究範囲が非常に広くなったという意味では、もちろんプラスなんだけれども、いま広田さんがいったような意味では、かなり現場離れしているという面も出てきたし……。

米沢　だから、ある意味で経統研などが生まれざるを得ないような状況だったと思います。初めの統計学会のようなものがずっと続いていれば、あるいはそういう余地はなかったのかもしれませんが、戦後は量的には拡大したけれども、質的にはそれほど変化が見られなかったという点もあったし、現状にあき足らない面を補うような別の学会みたいなものが必要になったということは、否定できないのではないかと思います。

三潴　先生は、経済統計研究会へは、どなたからお誘いがあったのでしょうか。

米沢　それはあまり記憶がないのです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　結局、東京では松川七郎さん。上杉正一郎さんは、あのころまだ関西だったでしょう。

広田　それから、丸山博さんが厚生省におられたから重要でしたね。松川さんが行ったり来たりして、上杉さんも関西でした。丸山さんは熱心でしたね。

三潴　たしか経済統計研究会は、最初は関東東北支部といった。そしてやがて、米沢先生の方の東北支部というのが成立した。だから、最初は、米沢先生も関東東北支部に入っておられた。

それで、経済統計研究会も30年近く、つまり統計学会の半分ぐらいを経過したんですけれども、これについてどういうご感想をお持ちですか。さっきちょっとおっしゃったように、必然性はあったということですが。

米沢　やはり、日本統計学会だけでは味わえないような面を、そちらの方に求めるということだったと思います。生まれる必然性もあったし、存続の必然性もあったと思います。

三潴　統計学会の中で、もちろん全員じゃないけれども、経済統計研究会のメンバーは、統計学会の中で大いにやってほしいということをいう人もなくはないんです。事実、両方に入っている方もたくさんいる。

経統研は、当分は学会にもならず、いまのままで続くと思われますが、ただ、経済統計研究会の方もいまのように25年ぐらい過ぎると、いろいろ質的に変わるのかどうかわからないけれども、当然若い人がどんどん入ってくるし、おそらく日本統計学会だって、最初は集まればみんな顔見知りだったわけでしょう。

米沢　ええ、そうなんです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　経統研でも、最初はそうだったんだけれども、いまは顔を知らない人もずいぶんいる。関東支部でさえもそうなのだから、いわんや全国総会やったら、胸に名札をつけなければダメだということになってきて、やはりこちらの方も、統計学会ほどではないけれども、量的拡大はあります。いま200人くらいですね。できたときを思えば、相当な量的拡大だけれども、なぜか爆発的にはふえない。

広田　それと関連する問題なんですけれども、統計学専攻の大学院大学をつくったらどうだ、統計学部をつくったらどうだというようなことが、かなり多くの人の有力な意見としてあります。アメリカなどではそうなっているようですね。私は反対なんですが、その点はどうお考えになりますか。

米沢　それは戦後の一時期に非常にいわれたことを、私も記憶しています。たとえば、東北大学で統計学の講座を新設するときには、将来、場合によったら、統計学だけで1学部というか、1学科をつくる基礎にしてもいいのではないかといって、たしか3講座要求したんですが結局1講座しか通らなくて、その後はくじけてしまってそれだけでずっと過ごしているんです。何か時の勢いというような感じはするのですけれども、幾らかでも統計の講座が多くなるのは望ましかったので、そんなことに片棒をかついだことはあります。それから、これは最近の話ですけれども、筑波大学でも専攻をつくるという話もありました。

確かに私も、統計というものは、理論的には1つの研

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

究の方法なのだから、ほかのものと結びついてやるのがいいわけで、統計学だけで独立の学部というのは、ちょっと無理というか、適切でないのではないかと思いますけれども、ただ、講座をふやすための手段に、そういう方向も考えられるということで、ときにはそれを推進することが、戦略的には必要な場合もあったのではないかと思います。

広田　お互いに閉鎖的にならないで、共同で情報交換をし合うということは、絶対に必要だと思いますけれども、それぞれの研究分野と実質的な研究と結びつくことで、それぞれ個性的な発展をしていくんじゃないかと思うんです。

米沢　確かにそう思います。

三潴　先生の場合、国際学会といえば、ISIとRSA、2つの会員でいらっしゃるわけですか。

米沢　そうです。あとAmerican Statistics Association に入っています。

広田　あれは外国人の学会ですか。国際学会というふうにしているわけですね。

米沢　日本からいえば国際かもしれないけれども、別に国際学会ではないわけです。ただ、たまたまそれに入って、雑誌を購読しているだけのことです。

三潴　ISIの方は、先生は本会員ですか。

米沢　ようやく正会員に認められた。

三潴　それからセクションの方は、IASSというのがありますね。あれにも入っていらっしゃるでしょう。

米沢　ええ、入っています。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

三潴　あと、先生の方で特に何かお話しくださることがございますか。

米沢　ちょっと余談みたいだけれども、例の日本統計協会の『統計』という雑誌の4月号の中にちょっと書かされたのです。統計短評というのですか、何を書こうかと思って困っていたんですけれども、東北大で出している「萩論叢」というのに、10年ぐらい前に書いたものがあったのを思い出して、自分で書いたものだから剽窃にはならないだろうと思って、(笑) それと大体同じようなことを書いたんですけれども、4月号が出たらぜひごらんになっていただきたい。

広田　ペデストリアン・サイエンスと書いておられる。そういう趣旨ですね。

三潴　鮫島さんからですか。

米沢　ええ、そうです。それから守岡さん。

三潴　守岡隆さんはよくご存知ですか。

米沢　やっぱり統計学会で知り合ったのです。あの人も実務関係から出てきた人です。

統計局の雑誌（統計局研究彙報）にも、やっぱり生産性の問題か何かで書かされたことがありました。

広田　経済統計が、だんだん量的にも社会的にもウエートが大きくなってくると、それに応じて、統計局のウエートというのは、おのずから下がってくるんですね。やっぱり通産省だとか、大蔵省だとか、日銀だとかいうのが……。

三潴　人口統計と……。

広田　統計局なんかがむしろ100年史などといって、三潴さんじゃないけど、(笑) 少し歴史的な味を出してきて

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いて、それはいいことだけれども、何といっても、経済分析する場合の経済統計の中核的な部分は、やはりわれわれの手の届かないところにある。

三潴　先生は、自分は科研費を一番こまめに申請したんで、事務に迷惑をかけたと、どこかでおっしゃっていたように思いますが、科研費はぼくもやったけれども、後の整理が実にめんどうくさいでしょう。

米沢　そうでもなかったと思います。

三潴　それは個人研究のみならず、総合研究の方もあるんですか。

米沢　ほとんど個人研究です。総合研究も幾らかありましたが。

広田　まめに出されたわけですね。そして研究報告もちゃんと、どの研究費を使ったというように……。

「萩論叢」は、学生のゼミナール連合会みたいなものの雑誌ですか。

米沢　そうです。それにこんなものを書かされたもので、それを書き直したので、『統計』4月号が出たら、見ていただきたいと思います。統計学というものは、非常にじみな、着実な学問だということをいまでも痛感しているわけです。

広田　腰に弁当ぶら下げて、わらじがけで歩くというのが、杉亨二の最初のころだったんですね。そういう気持ちがないと続けられませんね。

三潴　先生、こういうことはお感じになることはないでしょうか。これは有沢先生の回顧談か何かで読んだのですが、自分は経済学と統計学の2足のわらじをはいてい

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

るんだ。経済学と統計学のバランスをとってやらなければいけないということは、非常にむずかしいことで、下手をすればアブハチとらずになるんだけれども、要するに経済統計というのは、そういう宿命みたいなものがあるのだということをどこかで読んだことがあるのですが米沢先生もそういう意味で2足のわらじをはいていらっしゃるのか、それとも、先生にとってはそうじゃないのじゃないかという気もするんです。

米沢　あまりそういうことは……。むしろ経済学の方はやらないから。

三潴　そうではなくて、さっきの工業分析から入られたということだから。

広田　有沢先生の場合には、元来、統計学をやるつもりはなくて、糸井さんが亡くなられて急にということが、最後まで残るんじゃないですか。そこは米沢先生と違う有沢先生の場合は、2足のわらじというような言い方になる。

三潴　それは、米沢先生には当てはまらない。

広田　米沢先生は、最初から1足のわらじ、経済統計学ですね。経済統計学という常識的な理解の仕方からいうと、はみ出てしまうものが出てきますから、そこのところはちょっとむずかしいですね。それで、社会統計という言葉を残したくなるんだけれども、社会統計というとまたドイツ独特の社会統計学的な考え方を連想してしまいますね。それだと、いまの経済統計にはちょっと当てはまらない。

三潴　社会統計というと、文化統計とか、社会学の分野になってしまうでしょう。そうすると、やっぱり社会経

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

済といわなければならない。

米沢　分類の方でも、社会経済分類というのが悩をきかせているわけだけれども、(笑) 社会現象というのは複雑ですよね。

広田　歴史の方では、社会経済史学（ソシオエコノミック・ヒストリー）というのがありますけれども。

三潴　いろいろおもしろいお話も出るようですが、このあたりでインタビューを終わらせていただきます。

長時間ありがとうございました。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

25字×28行